

地理学の一般理論のために

フランコ・ファリネリ*
(遠城 明雄** 訳)

Franco FARINELLI

Pour une théorie générale de la géographie.

© *Georhythmes 5, (Recherches géographique, Genève), 1989.*

1. 世界から空間へ, 自らの目でもって見ること (Autopsie) から抽象化へ

この言説は、ひとつの年譜学を提案するものでもないし、厳密に言えば、地理学の認識論を提案するものでもない。ここでは**地理学の理論であると同時に地理学の歴史学と考古学であるようなものを構築し、素描することが重要となる**であろう。つまりこの二つの企図は切り離すことができない。我々は存在論的な問いに取り組むことになる。つまり特に空間という観点から世界を理解することの起源はどんなものであったのか？空間は過程であり、換言すれば持続であって、時間は「語り *narration*」と等しい。

したがって音楽（指揮者の最初の身振り）の中でいわれているように、私の始まり *attacco* は、空間の誕生を想起することである。

『オデュッセイア』のなかで、オデュッセウスとその同伴者たちは、なぜ羊の腹にしがみついただけでポリュフェモスの洞窟から脱出したのか？ホルクハイマーとアドルノにとって『啓蒙の弁証法』¹⁾のなかで、その答え自体は簡単であった。なぜなら、キュクロポス（一眼の巨人族）の思考は、「掟も、体系もなく、ラプソディ的」だからである。しかし野生の思考に関するクロード・レヴィ=ストロースの探究や、ギリシャ思想の起源に関するジャン=ピエール・ヴェルナンの諸研

究のあとで、問いはより複雑に思われ、フランクフルトの哲学者たちが主張したように、「ブルジョワの些細な問題」では全くない。ポリュフェモスは動物たちの背中を手触りで確かめるだけである。なぜなら自然的宇宙を「幾何学化」する以前の神話的思考にとって、世界は（まだ）距離、位置、運動によって認識されないからである。むしろ世界は複数の力の階層であって、その厳密で複雑な秩序は、「力の連関、存在、権威、威信の階層、支配と従属のつながり、によって構成されている。その空間の諸側面 宇宙の水準と空間の方向性は、幾何学的属性よりも機能、価値、配列の差異を表している」(ヴェルナン)。したがって巨人にとって、上にあるものすべて（上位レベル、背中）が、下にあるものの全体、つまり動物の他のあらゆる部分にも当てはまることになる。なぜなら巨人はその本性上、統制を行うからである。ところが純粋な次元間の連関として空間を概念化することと無関係なのが、まさにこうした信念であり、我々がいまだにポリュフェモスの素朴さを信じていることに由来する信念である。しかしながら実はそのことを信じることによって、我々は今の現実に対する我々自身の無邪気さを示すほかないのである。

野生の思考は、**抽象化とは根本的に対立する *autopsie***（誰かが自分自身の目あるいは他者の目によって獲得する見方）を実践していると言えるだろう。自分の目で見ることの認識論的な原理、それは素朴に信じることであり、なぜなら見たからである。**現実の厳密に質的な概念化**。理性はそれを、空間として認識

* ボローニャ大学

** 九州大学

された世界の量的な概念化へと移行させる。我々は既に、神話（ポリュフェモス）とロゴス（オデュッセウスあるいは組織化される言説、合理性、理性）の間の対立の帰結として、空間の誕生を位置づけてきた。自らの目でもって見ることと抽象化、つまり地理空間の誕生は抽象化の最初の帰結である。原初的に実現された抽象化、それは人間（オデュッセウス）が、世界、大地をその表層（それは空間である）からはぎとりつつある過程であり、神話を知ることもない抽象化である。それはオデュッセウスの企みであり、地理学の誕生である。神話にとって、世界全体が残っており、その内部では世界の表面（表層）と実質とは区別されない。しかし認識という行為、つまり自己組織される理性の行為が抽象化であるとしたら、神話は autopsie、つまり自らの目でもって見ること、である。ここに西洋文化の根源的なパラドクスがある。つまり自らの目でもって見ることが、まなざしの不在として現れつつある。オデュッセウスとその同伴者たちは、キュクロポスの知らぬ間に洞窟から脱出するために、羊の腹の下にぶら下がる。羊の背中にのって通るのを自制した用心深いポリュフェモスの試行錯誤は、試験、神話にとって唯一可能な試験、つまり上にいるものを確かめること、に対応している。なぜなら神話にとって世界、階層、統制、権力だけが存在するからである。しかしながら神話が採用できる試験は、オデュッセウス、つまり合理性にとって少々素朴な試験である。オデュッセウスのおかげで西洋的理性が誕生しつつあるのだが、その企みは、まさに抽象化（文字通りの意味で「何かを獲得する」）を通じた空間の発見、すなわち次元、世界の深層と表層それ自体の間の区別の発見である。

2. 認識論的結婚

地理学の理論のために、なにか、つまりなにか別の基本的な手がかりが付け加えられねばならない。そこで（「空間の認識を目指すこと」）、それは操作的な定義にすぎない。ところで別の可能性が存在する。すなわち地理学の文字通り、文献学的定義である。地理学 *Géographie*、それは「*géo*」（「*Gè*」、大地）と *graphie*（記述）という二つのギリシャ語から構成された言葉である。二つの言葉は、我々が用いる多くの言葉と同

様に、二重の意味作用を持っている。「*graphie*」という言葉の二重の意味作用はしばしば強調されるが、「*géo*」という言葉の二重の意味作用はそれほど強調されていない。地理学に関する歴史と省察のなかで、前者（記述）は問題とされたが、後者（*géo*）についてはあまり省察されてこなかった。ゲー *Géo-* はギリシャ語であるが、ラテン語では「*ガイア Gaia*」である。「ガイア」は、ラテン語を話す人々にとって女神であった。つまり「ガイア」は文字通り、陽気で微笑みをたたえた女性を意味する。「ゲー」と「ガイア」は同じものである。西洋文明の最古の記録のなかに、紀元前7,8世紀（ホメロスの叙事詩とほぼ同時代）の哲学的省察を伝える（ソクラテス以前の哲学の内部で書かれたにちがいない）ひとつの『断片』が発見された。この断片は、ディールスによって編集され、最近になってニ・チェの編者であるジョルジョ・コッリによって編集された。哲学者ペレキュデスの作品²⁾のなかに、地理学の歴史について多くのことを我々に説明する驚くべき考えが、はっきりと見いだされる。文字通りでの、哲学が問題なのではない。ギリシャ文化において、哲学は学者（賢者）たちの時代の後にやってくる。

最初の賢人であるペレキュデスは、我々に「*ゲー(ガイア)*」と「*クトニエ Chthon*」の間の差異について語る。「ゲー」と「クトニエ」という二つの言葉は大地を意味するが、その意味には大きな差異がある。ペレキュデスは最初の聖結婚、つまりゼウスと大地との結婚を我々に語る。ペレキュデスは、永遠である三つのもの、ゼウス、クロノス、クトニエがあると断言する。しかしながらゼウス（天空）と大地、クトニエの結婚がある。そしてこれらの結婚の後でのみ、あるいはよりふさわしく言うと、この結婚の間に、クトニエはゲー、大地となる。ここで我々は地図学の誕生にいる。実際にこの聖結婚の儀式はいかなるものなのか？ 読んでみよう：「ゼウスとクロノスとクトニエは常にあった。しかしゼウスがクトニエに大地を与えた後で、クトニエは大地という名前となった...。」そしてさらに「三日後、ゼウスは大きくて美しい外衣をつくり、世界のあらゆる色でもってその外衣の中に大地 *Terre* や大洋（*オケアノス*）やオケアノスの邸を縫いこむ...。」最後に「これが最初の花婿が花嫁のヴェールをとって、花嫁に贈り物をあたえる（*devoilment*）儀式であり、これより神と人間たちにこの習慣が生まれたのである。クトニ

エはゼウスから外衣を受けとりながら、こう答える…。」

今日、まだ「真理を解明する (devoiler)」と言う。つまりヴェールを取り除き、はぎ取り、そして見るのである。認識についての我々のモデルは、いわば「ヴェールを取る」というモデルである。ところで古代ギリシャ人にとって、真理とは、語源的には、裸 *nudité* という観念と結びつく「真理 (アレーティア) *Alētheia*」, 「実在 *réalité*」である。ゼウスが大地にかぶせようとしたヴェールの上には、家、河川、海、大地が縫い込まれている。つまり地球のデッサン、最初の地図が縫い込まれている。そして儀式は、まさに花嫁のヴェールを取ることであり、同時に、花嫁に別のヴェールを作ることであり、認識とは、花嫁の裸体を垣間見ることができる瞬間である。しかしながら花嫁の裸体、それは深い闇である (「クトニエ」、その深淵のなかにある大地)。しかし全裸の花嫁を見ることができるその瞬間に、同時にもはや可能な認識はない。なぜなら認識不可能という深淵が現れているからである。新たなヴェールを花嫁にかぶせるのは、このためである。クトニエ、それは深淵として、地下として、深奥として、認識される大地である (死者を埋める土地)。この結婚は、深淵 (クトニエ) として、深奥 (闇、沈黙、見ることの不在、光の無さ、認識の欠如) として、認識される大地が、どうやってまたなぜ、ガイア、ゲーになりうるのかを説明する。大地は、天空と結婚した後 (最初の地理学的地図は天空の秩序の大地への投影に他ならない)、もはや認識されないだろう。もはや物の表面、物の上に投げられた外衣しか認識されない。つまりゼウスがその花嫁の肩にかけたヴェールだけが、認識されることになる。大地はもはや深淵あるいは深層であるクトニエではなく、ゲー、つまり表面、光である。そこに (単に地理学のみならず) 我々の文化の始源のドラマがある。我々は物を認識していると信じているとしても、対照的に我々は物の表面だけを認識することを余儀なくされている。クトニエ、深層、深淵、曖昧さ、判然としないものが、表面、光、微笑むことになる。これがギリシャ世界にとって、さらに我々の文化全体にとって、認識の始源の行為である。したがってそれは、知を大地の記述 (*géo-graphie*) へと還元することとして生まれることになる!

言い換えると、認識するためには現実的なものに外

衣を投げなければならない。この外衣があらゆる深奥、深淵、曖昧さを封印するが、しかしながら同時に物ではなく、物の表象だけを認識することを我々に強いるのである。我々の文化がその記憶を保持している文字通りの最初の結婚、文化の結婚という最初の行為が問題なのであり、我々は哲学の黎明にいたのである。我々はまだ知恵の輪のなかにいるが、プラトンは知恵と哲学を区別するようになった。すなわち哲学とは知恵の完成された状態である。ペレキュデスの思想は、直接的にオルフェウスの神話に由来するものであって、神話は歴史的に理性に先行している。

曖昧さ、「地下にいること *souterrainéité*」、深層、深淵。結婚は、身体の物理的、物質的な結合である。深淵とは、花嫁が裸になる瞬間、つまりそのほんの一瞬のことである。ヴェールが被せられるが、しかし同時に二つの間に融合がある。ところで我々の文化において、融合があるとしたら、可能な認識はない。したがって外衣が必要である。なぜなら、主体と客体の間に結合があり、分離や隔壁がないとしたら、深層、結びつきがあるからである。分離がないとしたら、可能な認識はない。なぜなら、認識は、二つの項、関係と分離、つまり破壊、対立の可能性を必要とするからである。Gegen-stand (ドイツ語で対象)、向かい合うことあるいは他者。したがって花嫁の外衣、つまり大地の外衣のおかげで、我々は大地を認識できるのであり、この外衣は障壁となるが、その外衣の下にクトニエがあることを決して忘れてはならない。クトニエ (深層など) は、常にクトニエのままである。外衣の下に深淵が常にある。しかしながらこの外衣 (最初の地理学的地図)、すなわち大地の表象のおかげで、現実、つまり世界に作用する区別を入れることが可能になる (オデュッセウスがしたこと。すなわち彼は世界から空間を分離し、空間をいくつかの次元によって定義し、世界に作用を及ぼし、ポリュフェモスを打ち破った)。我々は地理学の黎明にいますが、地理学は西洋文化と同時に生まれることになる。我々が地理学について語る時に、世界、すなわち一般に文化について語る力となる。結局のところ、地理学とは、まさそのことによって文化の本源的な行為なのである。

しかしながらモデルと物を混同してはならない。認識しえないのはまさに物である。これが西洋観念論の貢献である。つまりそれはカントである (物は認識で

きないが、現象、すなわち物が自らを示すことになる仕方だけが認識される)。これからは、他の諸科学と切り離すことなく、地理学について語らねばならない(たとえその言説に執着するとしても)。地理学の歴史、それはモデルと現実の間、言葉と物の間の混同の歴史である。なぜなら、実を言うとほとんどの地理学者が、「Géo」という語に関心を向けなかったからである。

3. 神話の形像(と言説の形像)

我々はこれから地理学という分野を構造づける二つの次元をもつことになる(図1)。水平軸は、抽象化と自分の目で持つて見ること(言い換えれば、理性と神話あるいは野生の思考)の対立である。垂直軸は、デッサン(記述)と言説の対立である。我々がこれから語ろうとするすべて(地理学の歴史全体)は、この4つの極の間の絶えざる緊張の結果にほかならないであろう。

神話が現実 世界をどのように表象するかを示すことで始めよう。15世紀中葉の浅浮彫であるリミニのマラステイ・ノ寺院を飾るアグスティ・ノ・ディ・ドゥッチョの版画を複写した図2を参照すると、都市を表象するこの図に、4つの重ねられた層、つまり天空、山、都市、海がある。蟹は黄道十二宮のひとつで、マラスタの領主の占星術の星であり、都市を支配している。それは天空に描かれている。なぜなら、権力は予期されない場所に現れることになるからである(海のなかで、権力が期待されるは明らかであるから)。他方で、河川が天空と海(「Marecchia」)をつないでおり、その向こう側の山は起伏が強調されている(ローマ人は山を恐れており、地中海のなかで都市だけが人に安心感を与える場所であった)。このようにして人間は、見えるものと見えないもの、現実と権力とそのすべてのこと、を鉛直性によって結びつける神話的イメージを持つことになる。

今度は、図3のクロード・レヴィ=ストロースによって複写されたブラジル内陸部のインディオ女性が描いた顔のデッサンを見ることにしよう³⁾。そこには直ちに、投影の同じ技術上の問題が見つかる。つまり平面上に丸い物(頭、地球)を表象すること。ここで芸術家は二重輪郭として顔を表示した。なぜなら顔の線を

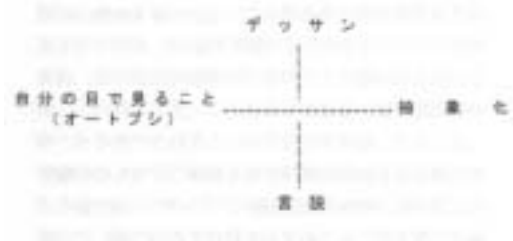


図1 地理学の羅針盤



図2 アグスティ・ノ・ディ・ドゥッチョの巨蟹宮

描く代わりに、社会的帰属、つまり社会的機能の記号である入れ墨を複写することを選択したからである。そして胸の上に描かれた壺は女性の象徴である（女性は自分自身以外の物を持っている。つまり女性は暗闇であり、クトニエの次元の象徴である）。したがって第一の場合と同様に、この第二の神話的な見方は、**現実の社会的性質に優位を与える。**

ところで、**地図学は反対のことを行うであろう。つまり読み手と社会的意味作用を関係づけるものを犠牲にしながら、大地の相貌を描く(デッサン)のである。神話は明示的に社会モデルを利用するのに対して、地図は解釈のあらゆるモデルを隠蔽する。**その社会的側面は覆い隠される。ここに地図学的エートスの定義があり、同時に我々の文化の起源にある抽象化としての（社会的なものの）**地図学的抽象化**という仮説の主張がある。そしてこの場合にも、起源が目的になる。つまり地理学のすべての歴史（我々の文化の歴史全体）は、デッサンによる言説の、地図によるロゴスの漸進的な植民地化に他ならない。『告白』⁴⁾のなかで聖アウグスティヌスは、ローマ文明の危機の時代である紀元4世紀に、ミラノの司教アンブロシウスを訪ね、アンブロシウスが黙読するのを見て、どんなに驚いたのかを語っている。確かに古代においても基本テキストを手で書いたが、弁別符（句読点）がなければ、慣用は専ら声によって作られた。修辞学の教授であったアウグスティヌスは驚いた。なぜなら彼の時代の授業 *lectio* とは、朗読すること *declamatio* であり、「読むこと *legere*」は「朗読すること *declamare*」を意味していたからである。そしてその驚きは、アンブロシウスが書物を地図のように扱っているのを見たためである。地図を高い声で読んだり、朗読したりできないからである。**地図の記号は同時にイメージの上に現れている。地図を信じようと信じまいと、地図を「問題化すること」(地図に注釈をつけ、それを議論して、異議を申し立てる)はできない。地図は閉じられたコードに従っており、開かれたコードの危機を惹起することになる。**

結局、近代性とはなにか？ ハイデッガーにとって、それは世界が世界像、世界のイメージに還元されることである⁵⁾。したがって地図学の畏から脱出して、隠されたものを明らかにし、物とクトニエの内奥、深淵の内奥に入り込み、仮象を越えなければならない。結局のところ、「地図 *plan*」とはひとつの企図以外のな

にもものでもない。



図3 カドゥヴェオの女性の描いた顔面のデッサン



図4 アナクシマンドロスの《地図》
(A.ヘルマン以後)

4. 人が見ないことをみるひとりの人間： アナクシマンドロス

地理学的伝統がわれわれに語る最初の地図学的表象の再構築 アナクシマンドロスのそれは、今世紀の初頭にヘルマンによって先験的（ア・ポステオリ）に確立された（図4）。ジョルジョ・コッリ（今は亡きイタリアの哲学者であり、ニーチェ校訂版のドイツでの編集者であった）は、哲学的であると同時に、文献学的な作品であるソクラテス以前の哲学者たちの校訂版を出版した。この史料に取り組むためには、まず第一にアナクシマンドロスとは誰か、アナクシマンドロスの役割は何だったのかが、理論的省察すなわち一般的にギリシャ哲学のなかで説明されねばならない。ジョルジョ・コッリは何と言っているのか？

「**アナクシマンドロスはロゴスを発明することになる**」**、すなわち言説のディアレクティックな形式を発明する**。結局のところ、ロゴスという形式の下で、人は現実のディアレクティックな表象を明らかにすることができる。「邪悪な人間たちの古来の道」を開くことが問題である。コッリに従うと、ギリシャ思想の起源には、ロゴスの二つの形式がある。第一の形式は、**沈黙の言説**という形式である。沈黙の冷たいディアレクティック、アナクシマンドロスの師であるタレスの幾何学的ディアレクティック。第二のロゴスの形式は、「**口頭の**」言説を巡って展開される形式であり、アナクシマンドロスが選択するのはこちらの形式である。彼は紀元前6~7世紀のギリシャで生を送ったが、この時代は古代文明において、生活の物質的構造に根本的なさまざまな革命が生じている時である。アナクシマンドロスは、なによりもまず賢者であり、**ギリシャ文化の黎明期と我々が我々の哲学と呼ぶことの間を線で結ぶ**ことになる人々に属している。

まず最初にアナクシマンドロスに関する哲学者たちの意見を引用しなければならぬ。アナクシマンドロスは、自然に関して書かれた言説を大衆化しようとした最初のギリシャ人として捉えられている。世界の最初の地図学的表象は、アナクシマンドロスに遡る。地図学的表象と自然に関して書かれた言説との間に、アナロジー、おそらくは同一性さえ存在する。

我々は、**地図学のイデオロギー**という観点から解釈を試みることによって、いまやアナクシマンドロスの

最も神秘的な側面のひとつを考えることになる。その断片を通して我々に伝わってくる最も重要なことは、**アナクシマンドロスが（大文字の）物とあるところの物 les-choses-qui-sont**、つまり我々と他の人間にとって**存在する物**、ただそれだけの「（大文字の）物」に比べて、**その存在が証明されクロノスの法に従っている物**、との間を区別していることである。つまり人は永遠であるものを見ない。

確かに、物とあるところの物の間に根本的な差異（二重の存在論）がある。なぜなら後者、我々が知覚できる物は、物の現れにすぎない。したがってアナクシマンドロスによって構築された世界の地図学的表象は、物の現れの現れである。そこでアナクシマンドロスの言説では暗示的であるが、地図学的表象の存在論的位置を理解するために重要な第三の水準に到達する。元からアナクシマンドロスは、地図上にある物は物ではなく、ある物の現れそれ以上ではなくて、**あるところの物の現れのイメージ**である、と意識していた。ここでカッシーラーの「表出 presentation」と「表象 representation」の区別が付け加えられる⁹⁾。地図は、「表象」の「表出」であり、現れの現れであり、存在の反映の反映である。そしてアナクシマンドロスはまさに、我々が見ることのできる物が、単に現れの現れであって、世界 我々が認識できる現実 は地図だけであることを、同郷の人々に納得させたかったのである。

ペレキュデスにとっても、物と我々が見ることのできる物の間に作用するひとつの区別がある。ペレキュデスは、知識に関する認識論的立場を確立し、むしろ我々に対して認識の価値を示そうとする。しかしアナクシマンドロスが地図学的表象を実現する最初の人物であるのに対して、ペレキュデスは（大文字の）物に**投げかけられた外衣**について語っている。外衣というこのイメージは、厳密に言えば、地図のパラダイムを構成する。しかしながら、アナクシマンドロスによってのみ、西洋文化において初めて、人間が語りうる物が作り出された。つまり「それが地図である」。そして地図は、「物の反映の反映である」。

主体と客体の間に常にひとつの**媒介**、関係の様相を確立する実体がある。しかし地図学によって**主体/客体の界面**の問題が提起されることになったのは、西洋思想の起源、アナクシマンドロスの時代である。さら

に地図学的表象がある限りでのみ、主体と客体は区別される。そしてアナクシマンドロスは、「ヒュプリス hybris」、つまり暴力とうぬぼれというイメージ、人間の物と神の物の間に立てられた境界を破壊する行為のイメージを残している。

ここに与えることのできる最も簡単な解釈がある。最初の地図によって、人間は世界について神のまなざしと同じまなざしをもつということである。天頂の醒めたまなざし、この瞬間まで人間に禁じられていたまなざし。また（最初の解釈と対立しない）別の解釈がある。つまり自らの言説によってアナクシマンドロスは、その時まで言葉で表現されず、また定義されえなかった（大文字の）物を名付ける能力を、ロゴス、言説に付与したということである。アナクシマンドロスは、あるところの物のみならず、形而上学的に（大文字の）物を語ることを敢えて行った。

最後に興味深い文献学的な命名がある。アルシェ Arché とは、その時まで（ピラミッド型社会における）「権力 pouvoir」を意味していた。ところがアナクシマンドロスは、この同じ時代に、「原則 Principe, 起源 Origine」を説明するために、「アルシェ」という言葉を用いた最初の人物である。地図学的モデルのモデルとは何かを知るという重要な問いが提起されるならば、こうしたことすべての説明が試みられる。換言すると、デッサンを統制する（言説の）抽象化の本質とは何か？

『パイドン』⁷のなかで、プラトンは大地がもはやなにもにも依拠する必要がない時に、大地の認識が神話から生じることになると説明している。そして A.フォン・フンボルトは『コスモス』（1848）のなかで、二人のバラモンの歴史を語っている。生徒：「なぜ大地は天空のなかに固定されているのか？」師：「大地は象をよりどころとしている。」生徒「象は何をよりどころとしているのか？」師：「亀を。」生徒：「亀は何をよりどころとしているのか？」師：「止め。おまえが信仰をもっているのなら、このような問いを発しはしない。」

反対にアナクシマンドロスによって初めて、大地は宇宙の中心に位置づけられ、不動なものとされる。そして大地はいかなる支えも必要とせず、この場所に静止したままである。その理由は？ 大地は天の周囲のあらゆる点から等距離にあり、したがって上にも下にも、一方の側にも他方の側にも行く必要が全くないからで

ある。「したがってアナクシマンドロスは宇宙（コスモス）を、純粹に幾何学的な諸関係によって構成された数学化された空間のなかに位置づけている」とヴェルナンは書いている⁸。

5. 幾何学的モデルの社会モデル

アナクシマンドロスの地図の畏に落ちないように注意すること、それは地理学の別のあらゆる畏に落ちることを避けることである。アナクシマンドロスの地図は、同時に証明の技術の集合である。つまりそれはあらゆる地図学的表象の本質でさえある（それはヴィトゲンシュタインが数学に与えた定義である）換言すれば、アレキサンダー・フォン・フンボルトが前世紀初頭に説明したように、地図はもはや事実と見解が分離されないという点から、事実と見解が混ざり合う場となる。アナクシマンドロスの地図においても事実と見解とがある。特に存在論的置換、つまり現実の本質の変換がある。人は新しいシニフィエを獲得し、シンボルとして機能することになる記号に直面する。アナクシマンドロスの問題は、占星術の「幾何学化」、あるいは占星術から天文学への移行の発端である。我々の文化において初めて、我々は最初の幾何学的モデルを構成する世界観、宇宙観を持つことになる（バビロニアの占星術からギリシャの天文学への移行は、天体と天空のプラグマティックで数学的な認識から幾何学的な認識への移行を示している。バビロニアの占星術師たちにとっていかなる「幾何学」も存在しない。彼らは間隔と周期性を計算することによって食を予想した）。

しかしながらアナクシマンドロスの表象の循環的かつ幾何学的なモデルの起源はどこにあるのか？

ギリシャの宗教のなかに、円を考える二つの方法、あるいは円の二つの概念がある。オムパロス Omphalos（臍）とヘスティア Hestia（竈）が存在する。円を考えるための二つの方法。つまり臍と竈。円形の物、円は女性のシンボルである。したがって暗い腹、臍。他方でプラトンは『パイドン』のなかで、ただ一人の女神が家のなかに閉じこめられているのに対して、ゼウスに続いて天空へ向かうすべての神を描いている。ヘスティア（クロノスとレアの娘、ローマ神話のヴェスタ）は、外延によって竈を指し示す名とな

る。竈は何を意味するのか。それは、囲い、円を意味すると同時に鉛直性を想起させる。なぜなら煙は天空（トランジット）に上り、灰は土壌、さらには地底に残り、大地に戻るからである。竈、それは暗闇であり、同時に女性性である。それは家のなかの神聖な場所（オイコス）であり、家を訪ねてきた人たちを迎え入れる場所でもある。竈に近づくことは、異邦人にとって直ちに家に迎え入れられることを意味する。火をつけると、煙は天空に向かう。人は死者たちの世界、祖先たちとコミュニケーションを行う。竈は三つの地平の上でコスモスとのコミュニケーションの手段となる。神、人間、地底、すなわちすべての人間の起源、生ける人間、死んだ人々の場所。しかしながら臍は人間の根っこである。つまり臍は臍帯を意味する。ギリシャ人にとって、まだ人間と死者あるいは祖先との間につながりがある。人間と大地それ自体の間のつながり。そこに円の本来の（二重の）機能があり、二つの用語の間に**機能の相同性**があると主張される。

さてアナクシマンドロスの地図を見てみよう。地図の中心はデルフォイに置かれている。それはギリシャ人の最も重要な聖域であり、ギリシャ人の臍の所在地であり、ヘステアの中心的聖域であり、竈の女神の家である。なぜなら同時にデルフォイは国の中心だからである。竈の本来的な機能と臍の本来的な機能（そして二つはともにシンボルとしての円をもっている）のなかに、**クトニエの機能**つまり地底（奈落）とのつながりの機能がある。ところで問題は、我々がみてきたように、地理学がまさにクトニエの次元の消滅とともに誕生するということである。アナクシマンドロスの地図は転換の一契機を示している。つまりクトニエの形態はまだ呈示されている。革命は、天空と中心がはじめて、地図の中でもはやクトニエ的な関係（臍と家庭）の同義語にとどまらず、こうした機能と関係を断絶し、幾何学的関係の意味作用、つまり中心に対するあらゆる点の左右対称、同一性という意味作用を獲得するようになる、という事実にある。天空の記号と中心の記号の機能転換が生み出される。世界の表象がある意味作用を受け入れる記号によって機能するようになるのは、記号が別の文化的価値を担うようになる場合のみである。

シンボルとは文化的価値を担った記号である。西洋文化における十字架のような記号を取り上げよう。十

字架は他の文化にとって意味作用をもっていない。**意味作用は物にあるのではなく、我々の頭、我々の文化、我々の教養のなかにある**。シンボル化とは哲学的な用語で、実存 *existante* ではなく、**實在 *subsistente*** である。シンボルの機能のなかに、いかなる人もそれをみることはできないだろう。

さらにアナクシマンドロスは、（天空による）シンボルが記号となり、異なったシンボルの価値を帯びるのを、みることを可能にする。アナクシマンドロス以前に、別のシンボルが存在した。これらのシンボルは、ギリシャ人の宗教思想を通して、ひとつの意味作用（臍という意味作用）を付加された記号であった。アナクシマンドロスとともに、我々は、シンボルが記号となり、今度はそれがシンボル、つまり別のシンボルになるのを目にすることになる。記号は同一のままであるが、別の意味作用を引き受けており、存在論的立場が変化することになる。それが最初の地図である。地図は記号に新しい意味作用を付加することで、実存的なシンボルを記号に還元する。しかしながらこの過程は完全に達成されない（それがすべての地図学の両義性である）。なぜなら中心はデルフォイのままであって、デルフォイはいまだ常に、竈のある場所であるヘステアを含んでおり、ギリシャの中心にとどまっている。

こうした着想によって伝えられる文化的価値の全体によって、アナクシマンドロスに世界の最初の地図を描かせ、また幾何学的な見方をそこに導入させた理由は何だろうか？

天空を解釈する別の可能性が存在する。『オデュッセイア』（2編）⁸のなかで、テレマコス *Télémaque* がイタクから自由になったすべての人々を招待する時に、これからの議論のなかに、我々はアゴラというものの最初の事例を手にするようになる。すなわち平等な人間の集合。同様に『イリアス』の中で、戦士たちがひとつの集まりを形成する時、常に行動のモデルがある。話し手がおり、聞くことになるのは他の全員である。他の人々は円形に配置される。話しをする人は権力を持った人であり、話している限り、杖を握っている。話し手が話し終えると、円のなかに戻り、別の話し手が前に出て杖を取る。つまり話し手は他の人々と平等である。思想ではなく、社会的実践のなかに据えられているのが、このモデルである。それは中心と円のモデルであり、パフチンが『叙事詩的社会』⁹と名付けた

もののモデルである。さらに諸関係の可逆性、対称性、交互性(が重要である)、アナクシマンドロスのモデルを決定しているのがそれである。ギリシャ社会においてアゴラとは同じ社会的地位にいる人々の集まりである(したがってそれは全ての人間の集まりではない。例えばそこから排除された奴隷と女性がいる)。アゴラがギリシャ都市を、それよりも古いフェニキアの大集落から区別する。ギリシャ都市には中心と共通の竈がある。アナクシマンドロス以来、このモデルが明確になった。それはまたギリシャ的ポリスが生まれる契機でもある。ポリスは、空間構成と領土整備の水準におけるアゴラモデルの拡張であり、最初の都市学者であるミトレスのヒッポダモス Hippodamos は、都市の碁盤割りを、その中心がアゴラとなるように格子状に組織化した。

確かにギリシャ都市と他の都市(例えば、商業的に言えばギリシャ都市よりも進んでいたバビロニア都市)の間に差異が存在し、それは中心、すなわちアゴラの存在にある。共通の竈がある。都市の巨大な竈が置かれている中心にある円。この中心は私的に占拠されるのではなく、公的な場所「*ta koïna* (コンミュン)」である。ポリスは、人類史において人間が社会生活それ自体に対して意識的な省察を行った最初の現れである。

さらに占星術と天文学の間に大きな差異がある。バビロニア人の宗教は星の宗教であった。なぜなら星の中に女神と神々を見るからであり、その宗教は幾何学的ではなく数学的な認識であった。ギリシャ人との差異は、エクリチュールの社会的地位にあった。バビロニア人の場合に、エクリチュールは書記たち(王の官吏)がひとり占めにしていた。エクリチュールは、王と神々の振る舞いに関する秘密を守るために必要であった。ギリシャのポリスは法の前で平等である人間の社会であり、エクリチュールは人々にこの平等性と透明性を保証する。ポリスではバビロニアにおけるように、秘密を守るのに役立つエクリチュールはもはやなく、法の不動性を確立するエクリチュールがある。もはや王の権力に機能するエクリチュールではなく、法それ自体の公共的本質を確立し、すべての人々に法の認識と法的行為の透明性を保証するエクリチュールがある。普及の手段であり、相互的で均等のとれた統制の手段でもあるエクリチュールによって、現在の我々

になじみ深い議論の方法が展開される。つまり論法は公的な論争、屋外などにおける議論となる。**知的活動の規則それ自体が修正される。**

階層的なピラミッド(エジプトのピラミッドは階段による社会のシンボルである)の逆転が存在する。いまや同じ記号を**平等性**という別の次元に投影する社会がある。幾何学の次元、つまり可逆性の次元、平等性の次元、そしてそこで諸関係は平等な人たちの関係となる。なぜなら中心をめぐる周辺の関係全体が「同一」、「同形性 *isonomie*」になるからである。しかしながらこのモデルは社会的実践である。

したがってアナクシマンドロスはその地図において、ポリスの平面(地図)をギリシャ人が認識していた世界、つまり**エクメーネ**の上に投影した。アナクシマンドロスはひとつの抽象を実行した。つまり社会的現実であるポリスというひとつのモデルを抽象化して、未知のもの全体の上にこのポリスを投影したのである。それが認識である。未知のものを把握するために既知のもの網目を用いること。ここに真の(最後の)「ヒュプリス *hybris*」、アナクシマンドロスの過剰あるいは暴力がある。

6. デッサンから言説へ：プラトンの深淵

アナクシマンドロスの地図はひとつの言説である(それは抽象化を通して世界それ自体を認識することを欲する)。抽象化、それはクトニエの次元の**省察を伴ったモデルの意識**である。**宇宙のヘスティア。もちろん地図(アナクシマンドロスのタブロー)はデッサンでもあるが、哲学的言説の内部に位置付けられる時のみ、理解され始めるのが地図なのである。**

世界認識のためのモデルという意識。エウリピデス Euripide によって、賢人たちが大地を母なる大地と呼ぶようになったと言われている。アナクシマンドロス以後、大地は宇宙の竈(臍)として記述されるようになる。それは宇宙に社会のモデルを投影することであり、社会的世界から自然的世界への投影である。この投影は、少なくとも幾何学的水準とクトニエ的水準という二つの水準を定義する。この投影は部分的な脱神聖化を形作るが、両義性を残している。つまり再シンボル化。地図はあるところの物の反映であり、(大文

字の)物そのものとしては不可視であった。

我々が過去の地理学に関連するいくつかの原理を確立する時にパラドクスのことは、特に今日の地理学との関係である。なぜなら我々は地理学的知の一種の考古学を行っているのであり、その現実の意味作用は今日の地理学を論じる時のみ、明らかになるだろうからである。現代地理学で起こっていることを理解するための根本的な方法がそこにある。この講義のタイトルは『地理学の歴史と認識論』であり、私はその題目の価値を認めている。しかしながら実際には私はすでに、ここで地理学の歴史を描くのではなく、むしろ問題や問いによって主題をはっきりさせることで、「問題構制の歴史」を語らねばならない、と言ってきた。

以下での根本的問題は、哲学と地理学の間の関係という問題である。この時点まで我々は、哲学と地理学の間を区別できずに、哲学についてだけ語ってきた。地理学者の意識の誕生の証明、「地理学」として自らを認識するようになる知的生産に到達するためには、ストラボンまで進まねばならない。つまりそれはローマ帝国における「野蛮な時代」、キリスト生誕以後の数年、我々の時代の初めまで進むことになる。ストラボンは、最初の地理学者たち(ホメロス)が哲学者であったと言うだろう。それ以前にアナクシマンドロスまで、人々は哲学だけを持っている。可能な区別をしないで、ただひとつの問題、つまり「世界の見方と表象」という問いが現出するのを示す最初の結節点が問題である。

アナクシマンドロスに関して、非常に強力なモデルが最初の地図学の出发点にあり、彼がまた地理学の最初の行為を構成することを我々は見えてきた。そのモデルとは都市(ポリス)である。都市という物質的構造物がいかにして世界に意味と秩序を与え、同時にギリシャ人に知られている世界、つまり「エクメーネ」に広がるために、コスモスのなかに投影されるのかを我々はみた。ドイツの哲学史家が「最初の哲学的彫刻」と名付けた最初の世界地図は、都市(ポリス)というモデルによって世界を理解し説明する。

都市について、我々には都市の哲学上の創設を示す基本作品がある。それはプラトンの『国家』¹⁰⁾(紀元前5世紀前半)であり、ほぼ後で見えるヘロドトスの時代である。今度はプラトンの『国家』を理解するという多少とも骨が折れるが、非常に有効な仕事に取り組

まねばならない。

プラトンは地理学者ではないが、我々が語ってきたように、プラトンは地理学者を哲学者から区別できない時代において書いている。(『国家』のなかで樹立された)プラトンの認識論を分析すると、例えばそこには現代の計量地理学、つまり60年代後半以降国際的に支配的となった地理学の形式の危機が見いだされる。

プラトンの探究は次のようなものである。正義でなければならぬのか、あるいは正義のようにみえるだけで十分なのか?これが『国家』の対話の論法である。問題は「あるということ」が必要なのかあるいは「現れていること」が必要なのか?しかしながらこの疑問から発して、プラトンはいわば我々が現実をみる方法を確立する。『国家』の第6巻のなかで、プラトンは根底的な真理を説明しようとして欲している。つまり視覚が、世界の認識に開かれた最も重要な感覚であり、根本的な感覚であることの理由、さらに目が我々の身体で最も重要な一部であること¹¹⁾の理由に関してである。その説明は次のようである。触覚や聴覚といった他のあらゆる感覚によって、人は対象と直接的な関係を持つ。もし私が部屋のなかにおいて、話し始める誰かがいたら、私は聞くにちがいない。またテーブルの上にある私の手の下に物があるとしたら、私はそれに触れるにちがいない。しかしながら見ることの場合にはそうではない。なぜなら同じ事例の場合に、見ることの可能性だけが存在するからである。もし偶然にも光がないとしたら、物を見ることはできない。したがって視覚は、プラトンによれば、最も複雑な感覚である。なぜなら視覚が機能するためには、客体でもなくまた主体でもない介在する第三者、第三番目の要素を必要とするからである。つまりそれは光(「ヘリオス Helios」)の介在である。

太陽は、「介在するもの *intermédiaire*」あるいは媒介であり、自然科学の動力であると同時に大地のありとあらゆるものの糧でもある。同時に太陽という介在は触覚のように「単純」ではなく、形而上学的次元に準拠するひとつの操作が、視覚にとって重要なることを示している。我々はこの認識論を理解しなければならない。なぜならこの認識論の内部にひとつの空虚、「深淵」、中断があるからである。それは単純な線形モデルではない。したがってプラトンは我々に語らないが、それなくしてはプラトンの認識論全体が機能し得

ないことを理解するように努めねばならない。プラトンの注釈全体が呈示する説明は、線分の比喩である(図5)。

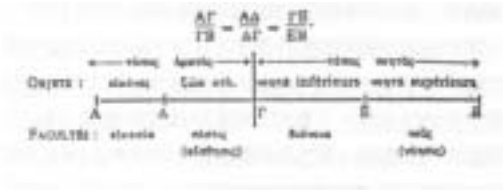


図5 プラトンの「線分」(『国家』第6章)

「なぜなら、暗い塊は仮設から出発して物それ自体へと向かう…。一方で明るい塊は仮設から出発してイデアへと向かう。」

プラトンにおいて、この二つの線分各々を構成する二つの部分の間に対称性が存在するが、部分それ自体の間には対称性はない。各部分は二つの断片から構成される。それは、闇(影を通した認識、イメージやイマジネーションと同義語の「スキア Skia」と、認識の線分の各断片においてのみ機能する光(明るさ)との対称である。

問題、それは断層の理由を理解することである。なぜなら二つの部分の間、すなわち可視的なもの(最初の部分)と可知的なものの間、我々が見ることのできるものと我々が理解できること(「ピステイス Pistis」、信じることと「ノエシス Noësis」、理解あるいは知性)の間、に「裂け目」が存在するからである。プラトンにとっては、これが根本的な分割である。我々が見ることのできるものと、我々が理解することのできるものがある。我々はすでにアナクシマンドロスの「物」と「あるところの物」の差異によって、この分割を見てきた。それはまた、大地の「外衣」が、認識という観点から西洋文化にとってはじめて、大地それ自体の唯一可能な形式として現れた、ペルクユデスの断片から生じる区別でもある。確かに可視的なものと可知的なもの間にひとつの関係があるが、私はここで、可

視的なものと可知的なもの、世界について見ることができると知ることができるの間にプラトンが裂け目を置くということを強調しておく。

闇と光という対は重要な役割を果たしている。見ることのできるものの内側にある認識の第一段階、それはイメージである。プラトンに従うと、イメージとは何だろうか？ プラトンはイメージのいくつかの事例を与えている。例えば、物の水上への影であり、物の大地への影である。プラトンが認識のこうした各段階と認識の種別的な様相を一致させていることを、同様に明確にしなければならない。イメージに対してそれはイマジネーションである。イマジネーションとは、明らかに我々にとっての「想像力」と同じ意味ではない。プラトンにとってイマジネーションは、影や陰による認識の型のことである。

イメージを理解するためには、世界のすべてのイメージ、大地のあらゆる地図学あるいはすべての測定が、影によって機能した測定だったことを思い出さねばならない。つまり初歩的な道具を用いた地球の形態の最初の測定は、直接的ではなく、地球上への太陽の影の長さによって行われた測定だったのである。

そこにイメージを通した認識に対する批判、モデルの闇を克服するものとしてのイデアリズムの出現がある。プラトンは明らかに、先立つものすべてについては語らず、「影を通した認識」について語る。この認識はまず、「心像」あるいは「現実の形象化」の意味で理解される)「イマジネーション」の水準で構成される。プラトンの認識論によると、イマジネーションとは物の認識ではなくて、物の大地への反映あるいは影の認識である。それは認識の第一段階であり、可視的なものの認識の低い段階である。対象に照応する認識論的な段階は何だろうか？ それは信じること、ギリシャ語で「ピステイス」である。この認識論的体系において、人は対象を持ち、信じることである認識を持つ。それは可視的なものの認識よりも上位の段階にある。しかしながらこの段階にはさしあたり合理性は存在しない。なぜならプラトンにとって、実相(イデア)は可知的なものの水準に位置づけられるからである。それはプラトンが「知性的思惟(ディアノイア Dianoia)」、つまりフランス語で「判断」(理性の活動性)と呼ぶことである。ここにシステムの決定的な移行がある。なぜなら信じることから判断へと直線の裂け目、深淵が飛

び越えられるからである。我々は深淵について何も知らないし、プラトンは我々に裂け目の理由を語らない。プラトンはその注釈全体において、人間が可視的なものの秩序に限定されたものをイメージとして利用すると言うために、裂け目の形態が引き受けるものを示すだけである。いまやイメージとは「闇」である。ではプラトンにとって判断の対象、理性的認識の対象とは何か？ それは我々にとって幾何学あるいは認識の幾何学的方法のすべてである。しかしながら幾何学は認識の頂点ではない。なぜならプラトンが「ノエシス」、つまり物の可知性（理解）と呼ぶものが、プラトンにとって認識の（最後の）頂点だからである。

この関係は現在の哲学的な用語では「存在 *existant*」と「実在 *substance*」の関係と等価である。

この図式が明らかにする根本的な対立は言説とデッサンの対立、つまりディアレクティーク（ロゴス、言説）と幾何学（デッサン）の間の対立である。これは地理学的言説全体のなかで、一種の「羅針盤」の役割を果たすことになる構造的対立のひとつである（図1を参照）。

しかしながらプラトンの精神のなかで、幾何学（「モデル」）、それが闇である理由を説明しなければならぬだろう。プラトンは幾何学が可知的なものの最初の部分になると言う。なぜなら靈魂は、推論（幾何学）のなかで、複数の仮説から出発して、**頂点つまり諸原理ではなく、物それ自体（もちろん対象、あるところの物）に向かって移動するからである**。そしてその際にモデルの本質については仮説の本質への問いを発しない。反対に可知的なものの別の部分（上位部分）は仮説そのもの、幾何学的モデルから出発するが、実相（イデア）による認識だけの認識に到達するためにモデルそれ自体から解放されるようになる。この過程を明確にしてみよう。

最初の部分は幾何学である。魂は仮説から出発するが、それは基本的なものであり、下位の段階に位置づけられる物をイメージとして利用する。それが幾何学の定義であり、可視的なものの水準で模倣する物のイメージである。なぜなら可視的なもののなかにイメージと対象があるからである。そしてプラトンは、幾何学とは低い水準で模倣される物のイメージ、下位部門の影を生産する物のイメージであると言う。

この反対にプラトンは、実相（イデア）という上位

の認識において、魂は仮説から出発して認識を探究すると言う。しかしながらこの場合に仮説それ自体のイメージなしで、すなわちモデルなしにである。したがって分析は実相（イデア）という手段によってのみ行われねばならないとプラトンは結論する。

したがってプラトンのイデアリズム全体がイメージを通じた認識に対する直接的批判である。知性（認識、「ノエシス」とは、まず可視的なものの水準で、次に可知的なものの水準で、二重にイメージを超越することである。プラトンによると、真に認識するためには幾何学的図式から解放されねばならない。認識とはモデルの闇からの離脱である。世界を理解するために幾何学的モデルを利用する人は、同時に世界に理由を与えることはできず、世界を説明することもできない。「下に向かって *ta phénoména*」進むことは科学的ではない。

こうした分析の最後に、我々はひとつの仮説に進むことができる。その仮説は、我々が（地理学者として）認識する対象を図式のなかに位置づけることで、認識の線分の可視的なものと可知的なもの間にある切断、裂け目の場を占めている。その対象とは**地図**である。地図は、同時に対象とイメージの二重の本質に関与するための唯一のものである。それは対象がイメージに変換されるただひとつ場所であり、したがって可視的なものの領野と可知的なものの領野の間の唯一の界面である。

実証主義者が、非現実的で、レトリック的であると批判してきたプラトンのディアレクティーク全体は、イメージを通じた認識を告発することである。しかしそれが有効性を持たない認識だからではなくて、その本性が必然的に問われるような認識が問題だからである。プラトンは言う。人は幾何学者になることはできない。そして下部、つまり現実_に直接的に向かうために、上部、つまり幾何学の原理そのものへと向かわずに、幾何学から出発する。プラトンによれば、それは科学的ではない手続きである。なぜなら我々は幾何学の本質、すなわちプラトンの言語においては我々が起点とするイメージの闇について何も説明していないからである。プラトンにとって、ロゴス、ディアレクティークは、幾何学から出発してモデルの本質そのものに疑問を付さなければならないという意味で、幾何学の超越である。そして最後に、土台、つまり物の**現実**

ではなくて道徳的なもの(「善」)の形而上学に基づづけられたいくつかの原理に到達する。

ちょっと先回りしておくとして、我々はプラトンの図式によって、今日《計量地理学》と呼ばれているものに対する最良の批判を手に入れることになる。

7. 寝椅子, イメージ, 洞窟

プラトンによって提起された問題を通してこの分析を続けることができる。ここで寝椅子とはなにか。

まず最初に「寝椅子」,《物》がある。つまり神がこしらえた寝椅子がある(神の必然性に対して自問することができる)それが、寝椅子の「原型」,「モデル」,あるいは「プロトタイプ」,本質である。寝椅子は唯一のものでなければならない。神が「二つ」の寝椅子を作ったことに考えも及ばない。なぜなら、もし我々が二つの寝椅子があると認めるならば、必然的に二つの寝椅子のモデルとは何かという問題を提起しなければならないからである。

次に、現実のなかに可視的な「寝椅子」があること、それは職人によって作られた物質の対象であり、「原型」の寝椅子(物の本質)とは異なる別の寝椅子(あるところの物)である。

最後に「寝椅子のイメージ」,すなわちキャンパス上の寝椅子の絵がある。寝椅子の本質(寝椅子という物)があり、我々が用いる物質的な物としての寝椅子があり、次にタブロー上の寝椅子のイメージがある。

「絵画はタブロー上に寝椅子のイメージを生産することになる」。しかしながら我々は、プトレマイオス以後、地理学者が文字どおり、地図上に世界像(イメージ)を書き込む、つまり「寝椅子」のイメージをタブロー上に書き込むようになることができる。プトレマイオスにとって、ローマ帝国の《栄華》の頂点において、《géographia》という言葉は厳密には、《大地の絵 *pictura totius orbis*》を意味する。

したがって我々は、プラトンの作品のなかに、プラトンにとって「寝椅子のイメージ」を表象している(大地の絵の)地理的地図に対する厳しい批判をみることができる。タブロー上にある寝椅子のイメージ、それは実際には職人が作り出した寝椅子のイメージであって、寝椅子の本質のイメージではない。絵によって描

かれた寝椅子のイメージは、寝椅子がいかにして構成されるのか知らない人物によって描かれたイメージである。したがってその人物は寝椅子それ自体について何も知らない。さらにプラトンが語るように、(職人によって製作された)寝椅子の(画家によって描かれた)イメージは常に個別的なイメージである。なぜならその全体性のなかに寝椅子のイメージがないからである。すべてのイメージはひとつの視点を持っている。したがってプラトンは、「イメージが真理からいかに遠いかを見よ...」と結論付けている。「寝椅子のイメージ」は寝椅子の真理から三重の距離にある。それ故に三つの移行がある。「(大文字の)寝椅子」から「(小文字の)寝椅子」への最初の移行、「寝椅子」から職人の寝椅子への移行、そして寝椅子から寝椅子のイメージへの移行である。プラトンにとってすべてのイメージが真理から三重の距離にある(『国家』の第6巻の最後の部分を参照)そこに有名な洞窟の神話の真実の意味がある(第7巻)。

洞窟(洞穴)の入口と目撃者つまり内部で鎖に繋がれた人間の間に、火がある。火と人間の間に道が通っており、その上を人間と動物が列をなして進んでいる。これらの人物と動物の輪郭が火の薄明によって壁に照らし出され、前方ばかりを見ている人間は道の上を通り過ぎる陰影だけを見ることができる。その姿は火によって影絵芝居のように投影される。他のことを何も知らない人間にとって、その目に次々と現れるのが世界の現実である。そこでプラトンは次の問題を提起する。つまり鎖につながれた人間のうちのひとりが、奇跡的に頭を向けて、その束縛を解かれて、洞窟の入口の外を見ることができたとしたら、どうなるだろうか? その人は光を見るだろう。しかしながら直ちにはない。なぜなら太陽のために目がくらむ瞬間があるだろうから。

この神話はおそらく西洋文化全体の根底になる。この神話は、我々が現実について持つイメージがどれほどぼんやりとし、明瞭ではなく、人を惑わすのかを説明する。なぜならすべてのイメージは暗闇のなかで作られ出されるからであり、さらには暗闇そのものだからである。したがって太陽を見ることができる人間は、他の人間たちの上にいる、あるいは上にいるように思われる。そしてこの人は正面から現実を見ることを他の人々に強いるようになるだろう。反対に、この人が

洞窟のなかに戻ろうとしても、もはや他の人々と話ができない人間になるであろう。なぜならその人が言うことを信じることはできないからである。その人は(大文字の)物の「現実」を見た。

プラトンにとって、これは下から上へ、上から下へと進む手続き、道程である。それは「現実」を理解することで、下にいる人々に「啓示を与える」という目的をもって、その人々を導くために洞窟のなかに再び戻る倫理的命令、お好みならば倫理的義務、を持たねばならない人たちの手続きである。

現実には「非常に冷酷」であり、人間は、ニュアンス、つまり光と闇の間の移り変わりを調整する解釈の象徴体系(ユング)を必要としている。それがシンボルの誕生であり、西洋文化がなぜ「進歩」、道程、旅程というモデルを保持してきたのかも理解される。これが創世神話である。

プラトンは、自然そのものという問いを呈示するために純粹に必要なこととして、「見ることの不可能性」を説明する。すなわち、物理的な平面から形而上学的な平面に、(アリストテレスの言語のなかで言う)物の表象を送り返すことの必要性である。結局それは物を見る(あるいは見た)我々の西洋的な仕方である。我々は世界のこうした見方を変える最中にいる。しかしながら我々がそれを変えるためには、幾何学的モデルにならないような別の神話、別の語り、別のモデルが必要である。

我々が見てきたばかりのことの最初の「応用」は、計量地理学のなかに発見される。計量地理学は現在、我々が「人文主義地理学」と呼ぶようになっていたものと対立している。計量地理学とは、まさに幾何学モデルから出発して、幾何学の本質そのものを問うことなく現実を説明しようとする地理学である。さてプラトンの認識論によると、それは暗闇から現実に進む言説(ロゴス)である。したがって、我々がここで哲学を学んでいるとしても、それは単なる気晴らしではなく、**地理学の理解に必要なものである。**

我々はこれからヘロドトスそしてストラボンについて話をすることにしよう。『ヘロドット』と呼ばれる地理学雑誌があるが、それはヘロドトスが地理学の両義性の記号として解釈されるからである…。悪いことに、ヘロドトスは十分に読まれていない。なぜならヘロドトスの言説は非常に明瞭だからである。ヘロドトスマ

での支配的手続きは、言説と抽象化の間に 我々の「羅針盤」の論理のなかで 位置づけられる手続きである。ペレキュデス、アナクシマンドロス、プラトンにおいて実相(イデア)、ロゴスについて語られる時、抽象化について語られている。ところがヘロドトスとともに、言説が変化しつつある。そこでは、これまでのものと対極にある二番目の対、すなわち**デッサンと自分の目でもって見ることの結びつき**の機能がみられるだろう。最後にストラボンによって我々は地理学的意識の誕生を目撃するであろう。つまりはじめて地理学の自己-意識が現出することになる。ストラボン以前に、地理学者の仕事や役割、地理学の意味について決して意識的に語られることはなかった。

ヘロドトスにおいて、人は経験的水準で都市間の経路の距離と時間を表示すること(経路と周遊の表記)を通して体系化された膨大な地理的認識の生産を有することになるが、それは**あらゆる理論的な意志や厚みを欠いている。**

アナクシマンドロスの場合も、地理的生産の現実には植民地経済の現実と緊密に結びつけられる。ミトレスはオリエントに向かう小アジアの最も重要なギリシャ植民地ではないのか?

ストラボンに至るまでに、大陸部ではなくて、ギリシャの諸都市によって支配された空間のアジアの回廊部のギリシャで生まれた地理学がある。植民地理学、地球の再認識という観点から押し進められた実践的な知をその内部に含んでいる。しかしながら**哲学的観点から**、ストラボンによって地理学の歴史の研究が始められるにちがいないだろう。つまりその自己意識の誕生である。

8. デッサンと自分の目でもって見ることの間： ヘロドトス

ヘロドトスは地理学者ではない。地理学者に固有なその手続き、地理学的知の本質、地理学の役割について省察した最初の人物、それは**ストラボン**である。ストラボンがヒポクラテスの考えに従って、ホメロス(あるいは『イリアス』と『オデュッセウス』という二冊の偉大な古典時代の集成の著者)のことを地理学者であると断言していることに注意しよう。

ストラボンの生涯は紀元 40 年に終わっている(彼は紀元前に生まれている)のに対して、ヘロドトスは紀元前 5 世紀初頭に生まれ、490 年頃に死んでいる。両者の間にはほぼ 5 世紀のへだたりがある。

ヘロドトス、すなわち《歴史の父》は、語り手であり、その知の本質は口承にある。つまり彼は吟遊詩人であり、「ロゴ logoi」あるいは物語の作家である。そこから彼の作品の構造の複雑さが生まれる。ヘロドトスに関する両義性はすでにその生誕地についての間違いによって始まっている。ヘロドトスは流刑者であった。ヘロドトスはハリカルナッソス生まれのギリシャ市民であり、かつアテネ周辺に住む居留外国人である。ヘロドトスはその地でまさにポリスの危機をきっかけにして、僭主ペリクレス Péricles を知った。ヘロドトスはギリシャの領土全体に足跡を伸ばしたが、ポリスの危機の同時代人としてその生涯の終焉に、(『歴史』¹¹⁾のなかに書かれた)その語りのすべてをギリシャ人と異邦人との対立に帰着できると理解した。実際にギリシャの空間において、アテネは支配者の都市の役割を果たしている。ヘロドトスが死ぬ数年前にペロポネソス戦争が勃発した。今度は彼の作品のなかにアテネの支配との関連で情報の意志、戦略的意志をみることができる。

ヘロドトスにおける両義性は**構造的な両義性である**。つまりそれは**デッサンあるいは幾何学と言説あるいはロゴスの間の両義性であり**(羅針盤を見よ)、すなわち我々が地理学の一般理論の構築を試みるために用いる二つの極の間の両義性である。その語りのエクリチュールに先立って、ヘロドトスは自分の作品のなかで引用されたすべてのギリシャ都市に関する彼の語りが、ギリシャ人と異邦人(バルバロイ)というただ一つの対立(話す素質のない(「babole」)人々という意味でのバルバロイ)、換言すれば、文化と野蛮の間の対立に帰着できると理解していた。ヘロドトスのモデルはこの対立の上のみ基礎づけられ、彼によって創始された新しいパラダイムとこのモデルは、大きな成功を収めることになる。なぜならヘロドトスが『歴史』の集成を出版するのが、まさにその瞬間だからである。パロールからエクリチュールへと大きな差異があり、それは「神話」と「ロゴス」の間の存在である。口承性とは、受け手を引きつけるコミュニケーションの手段を構成しており、受けての意志はかき立てられるこ

とになるが、省察を邪魔するコミュニケーションの手段である。反対にエクリチュールとは、固定され凝固される何かであり、人間学的かつ政治的なメカニズムを構成する。換言すれば、表現の諸形式のうちの一つが、意味のあらゆる不安定性に対して開かれた場であるのに対して、別の表現形式のひとつは観念が固定化される場である。

この対立はまた、**地図から言説への移行**に関係している。ヘロドトスのなかに地図は発見されないが、**地図のエクリチュールの試論**が見いだされる。それは地図学の言葉による壮大な翻訳である。ヘロドトスのエクリチュールは地図を擬態することから成り立っており、**その記述モデルは幾何学モデルである**。パロールは(ヘロドトスの目には)神聖な何かであるのに対して、エクリチュールは平凡な何かである。そしてヘロドトスの言説はデッサンに囚われている。地理学におけるヘロドトスの役割あるいは位置は、「**自分の目でもって見る**こと」の代表者のそれである。その上ヘロドトスは古代の地図学者たち、とりわけアナクシマン드로ス出自のイオニア学派の仕事を、笑いを引き起こすような皮肉でもって批判する。「私は笑う…」と彼は言う。なぜなら、そこには論法が欠けているからである。地球が円形であることを示すのはばかげている。「私は地球の各部分の大きさがどのくらいかを、わずかな言葉で説明することになる。抽象的な全体性を呈示するのではなく、ヘロドトスは「できる限り精確な」仕方地球の形を呈示することを欲した。ヘロドトスは、確かにその時には欠けていたエクリチュールのなかで精確さをもって、地球の全体性を復元するために、その諸部分における土地から出発する。だが「最も離れたエクメーネの諸部分」に関する『歴史』第 4 巻のなかで、「自分の目でもって見る」以外に人が欲することのすべてが見いだされるが、ひとつの問題が提起される。

アナクシマン드로スの地図の注釈のなかで、ヘロドトスはエクメーネの周辺部の既知の世界で最も東部にあるスキチアについて書いている。ヘロドトスは、スキュティアにいたことがないのにスキュティアについて語り、スキュティアが「両側で海に接触している四角形」を形成していると断言する。ヘロドトスは既知の世界の周辺部を記述するために、幾何学モデルを使用しなければならない。中心部から遠ざかるにつれて、

記述の幾何学モデルがより明らかとなる。同様にリビア（認知されていたアフリカ）は、向かい側にあって直線で各 10 日間の行程距離にある無数の丘になる。そこには自分の目でもって見ることの実はなく、それは幾何学グリッドに過ぎない。ヘロドトスの記述の仕組みは、地理学の実践においてはじめて、対称性（シンメトリー）と類推（アナロジー）という道具を非常に明示的な仕方を利用して。我々は、おそらくヘロドトスの歴史のなかで最も古典的な場所となる所でその利用を見ることになる。つまりナイル河の記述、あるいはむしろ**ナイル河の発明**（ナイル河の完全な姿はやっと前世紀になって発見された）

（以前の構築物である）アナクシマンドロスの地図を観察すると、地図の中心がジブラルタルの東側、ヘラクレスの植民地から出発し、デルポイとタウルスを通して、小アジアへと至る本当の**赤道**によって分割されていることが気づかれる。アナクシマンドロス以後の地理学者たちの間で、中心線の上下の対称性が既に注意されていた。この中心線付近の空間は、中間という意味で「温暖な」気候に覆われている。そしてこの直線から、北は寒冷な地方に対応し、南は暑い地方に対応する。このような恒常性は航海者たちによく知られており、既に（その地図学がヘロドトスを笑わせた）イオニアの地理学において獲得されていた。そしてそれは地図上に引かれた最初の抽象的な幾何学の線である。この線は対称性と同時に逆転を表している。空間に関する対称性、だがその対称性には空間それ自体の性質に関する逆転が伴っていた。実のところ、この「地中海」の赤道がアナクシマンドロスの地図の原本に記載されていたかどうかはわからない。ヘロドトスはいつもダニューブ河（北側のイストロス河）との類推（アナロジー）によって（南側の）ナイル河を描いている。ヘロドトスは次のように書いている。

「ナイルは、リビアから発しリビアを真二つに切って流れている。そして私が既知のことに基づいて未知のことについての観念を推測してみるに、ナイルはイストロス河と同じ位の距離から源を発している。イストロス河はピュレネ山脈に近いケルト人の国から発し、ヨーロッパを二つに分断して、ヨーロッパ全土を貫流して、ミトレスの植民者が住む黒海 Pont-Euxin に注ぐ。人間が居住する地方を流れるイストロス河は多くの人々に知られているのに対して、ナイル河の水源は

知られていない。なぜならナイル河が流れるリビアは人が住んでおらず沙漠だからである。」

さらにヘロドトスは推測によって、既知のものから出発して未知の何かに関するひとつの観念を作り出すことになる。赤道はその対称性の軸であり、したがって上と下にある二つのものが問題となる。それはヘロドトスの空間概念全体の対称性の線であり、それと同時に、ヨーロッパとエジプトの間の対立を保証する性質の逆転の線でもある。「私がこの河について知っていること、私の調査の及び得た限りのことは、ナイル河はエジプトに注いでおり、このエジプトはキリキア Cilicie の山岳地帯にほぼ相対している。ここから黒海のシノペ Sinope まで直線距離にして軽装の旅人が 5 日を要する行程である。したがって私の見解では、リビア全土を貫流しているナイル河は、その全長がイストロス河に等しいのである。ナイル河については以上の記述に留めよう。」

この引用のなかで興味深いことは、それが類推（アナロジー）の遂行だということである。ヘロドトスの論法は、二種類の空間の間の思弁的な対立によって決定される論理に基づいている。赤道線の北と南の空間、それは暑さ 寒さ、既知 未知、人間 未開という性質の逆転によって決められた対称的な空間である。その論理は幾何学から生じている。それは地理学者たちが地図上に生産した最初の人工的な線であり、ヘロドトスはナイル河、キリキア、シノペの間に一種の垂線を引く。したがってそれは、**自分の目でもって見ること**によってのみ作られたのではない。なぜならその言説は幾何学に依拠しているからである

したがって言説がデッサンを支配しているアナクシマンドロスのような哲学者とは反対に、ヘロドトスとともにデッサン（幾何学）と言説の間の限界点、デッサンが言説を統制する限界点に立つことになる。ヘロドトスによって関係の逆転が目撃される。既知の世界の中心部から離れるにつれて、幾何学の図式があらゆる記述をつかさどる。事実、ヘロドトスはいわゆる地図を製作しなかった。むしろヘロドトスは図式、メンタルマップを作成した。ヘロドトスの『歴史』は、地図学の注釈と似ている。しかしそれは、地図を破壊するためではなく、**言説それ自体を地図に戻すために、地図の言説を活用すること**である。

9. デッサンに抗する言説：ストラボンとエラトステネス

ヘロドトスをイオニア地理学と対立させる論争が生じた後で、いまや別の対立、つまりストラボンとエラトステネスの間の対立が現れる。この対立は我々を紀元初頭に向かわせる。ストラボンの地理学は1世紀前半に書かれたが、エラトステネスを知るためには、ストラボンの地理学の最初の2巻を参照しなければならない。なぜならエラトステネスの地理学は失われているからである。ストラボンとの論争を通してのみエラトステネスの地理学を知ることができる。序論のなかで批判のためにエラトステネスを引用することで、いわばストラボンはエラトステネスを保存させたにすぎないことに注意しよう。

改めて議論は構造的な対立の上にある。それは一度、デッサンに対する言説の力と言説に対するデッサンの力の間の対立という問い、あるいは幾何学の専制に対してロゴスと「哲学的な選択」の防衛という問いであるが、以前よりも明示的な仕方でも問題化している。変わった点は、関係の様相と性質であって、幾何学の専制(これを擁護したのはエラトステネスである)とストラボンによって擁護されたロゴスの優越性という二極の間の対立の形式ではない。

17巻の書物の冒頭でストラボンによって論じられた問いは、ホメロスが地理学者であるかどうかを知ることであった。エラトステネスの意見では、ホメロスはほらふきにすぎなかったからである。エラトステネスとは誰か？

紀元前280年頃のアレクサンドリアの図書館長(その時代の知識人にとって最も重要な役割)であったエラトステネスは、西洋全体の世界観に影響を及ぼしている。エラトステネスのあだ名は「とんま Bêta」であった。Bêtaとはギリシャ語のアルファベットの二番目の文字であり、ヘレニズム時代の文化によればプラトンの後の二番目である。エラトステネスは詩人、歴史家、数学者、天文学者、地理学者であった。彼は、アレクサンドリアで夏至の天頂時の大地との傾斜から太陽の影を計算し、次にその結果をアスワンという町における夏至の測定と比較することで、子午線(円周)を測定した最初の人物であった。事実、彼は10パーセント未満の誤差しか犯していない。

エラトステネスの地理学は測定の地理学である。エラトステネスにとって地理学者の役割は、大地の測定を行うこと、世界の地図を作製することである。ストラボンもまた地理学者は地球の地図を作製しなければならず、幾何学的方法を通してそれを行うと考えていたが、これが両者の唯一の共通点であった。その対立は地理的知の意味の水準に置かれることになるだろう(「意味」とは「シニフィエ」と同時に「方向」に言及する)。

我々が利用する原典は、ストラボンの最も重要な専門家であるG.オージャック Aujac が考証したテキストである(“Strabon et la science de son temps” PUF)。皆がホメロスを熱狂的に擁護するとしてストラボンを非難する(『文芸』の考証テキストを参照)。ホメロスを擁護するために、ストラボンは保持しえない立場を受け入れさえする。オージャックにとって、エラトステネスからストラボンへの移行は、アレクサンドリアにおいてヘレニズム時代の文化が世界の科学の見方を確立した瞬間から、人文諸科学の体系においてひとつの退行が生み出された瞬間への移行である。これらの著者に従うならば、それは「非論理的なもの」と前科学的なものへの回帰である。

実際に起こったのは反対のことである。なぜならストラボンの問いは、まさに科学的知の意味についての問いだからである。さて我々が知るころによれば、エラトステネスがこうした問いを提起しているようには思われない。それゆえに移行は、世界の科学の見方の構築と科学それ自体の問題構制の構築の間に位置づけられる。つまり世界観の構築から世界についてのあらゆる見方の本質に関する省察への移行である。結局のところストラボンはまさに、非常に近代的な地理学者であった。ストラボンによって、我々は地理学と地理学的意識のモデル、地理学の理論を手にするようになるだろうが、それは「物の秩序」をめぐる批判という側面で、近代地理学のなかでここそこに再び現れることになるだろう。ストラボンによつてはじめて、アナクシマンドロスにとってのような「モデルの構築」(「ボリス」のモデル)ではなく、実存しているものの批判として考えられねばならない政治的意志がある。ヘロドトスとは反対に、ストラボンによって生産された地理学的知は地図学をめぐる批判的な態度となる。ストラボンはいかなる地図も作製しなかった。ストラ

ボンは一いつの物語を示し、幾何学を用いずに叙述するのである。

我々はストラボンについていくつかのことを知っている。ストラボンはローマ帝国の周辺部、小アジア出身の教養あるギリシャ人で、黒海を囲む土地の王に連なる家族の出身である。ストラボンは若い頃ローマ(その時代のエクメーネの中心)にあり、次にアルメニアからリビア、チレニア海から黒海へと世界を通してアレクサンドリアに着いた。ストラボンは他の地理学者たちよりも多くの旅行をした。

「そうです。もしいかなる科学もそれを行っていなかったとしたら、それは哲学の問題です。地理的科学、それが我々の現在の研究の対象です。この科学に取り組むべき最初の人物は哲学者たちであった。ホメロス、アナクシマンドロス、ヘカタイオス、それからデモクリトス、ユードクス…。**地理学的知は哲学的知のひとつのヴァージョンである。**ストラボンが最初に主張したのはこのことである。

エラトステネスは**知の区別**を擁護する。

若い頃のエラトステネスと老境期のストラボンはストア学派の信奉者であり、禁欲主義を表明している。しかしストラボンは、ストア学派を放棄したエラトステネスを非難するが、ストア学派にとってホメロスは重要な準拠であった。そこに両者の論争を説明するための重要な点がある。ストア学派の教義にとって最も重要な価値は、文字どおり、世界の歩みを説明する規則、**ロゴスに同意すること**である(Pohlenz: "Die Stoa" を参照)。学派の発展とともに、ロゴスは「本質」の同義語となる。すなわち**コスモスが構築される論理**である。さらにこの規則は単なる知的な関心(「論理学」)ではなく、生の規範にもならねばならない。賢人の義務は、世界を包括的に理解することであり、**ロゴスとは世界と思想間の関係**と同義語である、生の規範としてこの規則を採用することである。

ところで**ストラボンは、エラトステネスがストア学派の知的側面だけを理解していたと評価する。**問題がロゴスを捕らえることにあるならば、思想によってそれを行うことができる(言語は思想と世界間の関係の翻訳である)。しかしながら**ロゴス 言語とロゴス 思想**は区別されなければならない。シニフィアンとシニフィエの間は区別されねばならない。シニフィアンのなかで**ロゴスと思想**は混合されるが、**ロゴスだけ**

シニフィエである。

ホメロスは人に教えるためではなく、人を魅了するためだけに書く**とエラトステネスは主張する。**近代の実証主義の起源において、**科学者の観点は、科学を自律的な知の領域として、自己を根拠付ける思想の構築として観る立場である。**つまり科学主義は、科学的な知の本質と組織を、生活の他の諸側面、人間の思想の他の運動との構造的かつ構成的な関係全体から切り離す試みである。知の絶対化、それは他のあらゆる思想形式に対する優越性の意志である。つまりエラトステネスは、**思想から切り離された領域として地理学**を考えている。

このような尊大さが揺るがされる。ホメロスはストラボンにとって、「いわゆる」賢人である。つまりストラボンという人物においては、科学を思想や表現の別の諸形式から切り離すことができない。実際にストラボンの手続きは、「**エヴェメロス主義者**」と呼ぶことができる試みである。エヴェメロスはストア学派に属し、全般にわたって**神話の合理化**を試みた。したがってエヴェメロスは、ストラボンがホメロスに関して指摘したことを非常に一般的なやり方で行った。神話、ゆえにホメロスの伝説とは、民衆の中により普及させるといった目的のために、神話の言葉で装われた合理的な説明に他ならない。エヴェメロス主義は衣服と中身の分離、神話、伝説を合理化する(あらゆる支配者における)試みである。

それはまたエラトステネスと向き合ったストラボンが、ホメロスに対して行ったことである。潮汐についての事例：ホメロスは海の連続性についての「...3 度波が立つと、3 度海が呑み込む」というような説明を作ったが、その説明はエラトステネスの目には余り重要なものとは映らず、ホメロスは気晴らしのためにものを書く詩人の典型であった。ここでストラボンがホメロスをかなり下手な仕方**で擁護するのは本当である。**ストラボンは、2 度ではなく 3 度であり、グラフィックな転写の間違いが問題だと言う。

それほど素朴ではない別の事例。キルケ、黒海の果てで生活する伝説上の人物はホメロスによってオケアノスのなかに置かれるが、それはエラトステネスには衝撃だった。ホメロスの目的が現実の距離を無視して、より単純に位置の決定を選択することにあるとストラボンは説明する。黒海は境界のない広がりであるオケ

アノスとは対照的に、全くといっていいほど認識されていなかった。同様にファロス島はホメロスによって海の真ん中に置かれるが、エラトステネスの目にそれはひどい誤りと映る。なぜならその島はナイル河の河口と向かい合っており、海岸線からあまり離れていないからである。ホメロスの時代にそれは正しかったとストラボンは説明する。なぜならナイル河はその時代以来、デルタを前進させたからである。エラトステネスはあまりに厳格だったので、大地の創建者たるナイル河の機能を考慮に入れなかったが、ホメロスはその機能を認識していた…。

こうした論争の下に何があるのか？ 詩と散文の間のホメロスの混交を超えて、ロゴスの本質という問いがある。ロゴスとは一であって、ジャンルの差異はなく、種の差異しかない。それは現実の同じ母胎における表出の二重の様相である。目的あるいは意図だけが変化する。詩を科学思想から分離できないだろうとストラボンは語る。そしてホメロスはまさに最初の地理学者である。ホメロスの作品のシニフィエは、たとえシニフィアンが二重であるとしても、一義的で唯一的である。さらに知は専門化されるのであって、地理学は記述のひとつの様相にすぎない。

地理学における百科全書的精神は確かにストラボンによって宣言されるが、それは次のような意味においてである。つまり人はただ一つの哲学の選択に基づく複数の知を、支障を来すことなく対置させることができる。不運なことは、百科全書的な側面だけをストラボンから受け取ることである。だが哲学の単一性への関係に関して、ストラボンの正しさは認められなかった。

ストラボンは自らの哲学的な選択を述べている。「我々、ストア主義者…」ストラボンの信仰の告白は、彼のエラトステネス、さらには同時にヴィダルの、クラヴァルの実証主義地理学全体に対する批判を凝縮している。ストラボンは自らの地理学にひとつの目的を付与するが、その目的とは**権力を保持する人々に直接的に有用な知の構築**である。イヴ・ラコストの考えとは反対に、地理学的認識の政治的有効性を賛美したのは、ヘロドトスではなくストラボンである。「歴史に奉仕する権力をよりよく行使するために、ひとつの帝国の下に世界を統一すること」。プラトンと同様に、哲学の手助けによって権力を把握するのが学者であり、

使いやすい知は君主たちを飼ひ慣らすことができるだろう。権力を利用するために権力に奉仕する理由（一人の地理学者にとって非常に難解な哲学上の問題）を顧みないひとつの科学。そこにストラボンの両義性のすべてがある。

ストラボンの地理学は孤独なロゴスであり、ホメロスに対する彼の擁護は、定義上、**聴覚が視覚以上に重要であることを示すことになる**。ストラボンは次のように引用する。「他者が情報に基づいて権力を行使する哲学者の代弁者たちを見て、そして私に語った。」哲学が、推論する能力を有し、哲学的であると同時に社会的でもある知を事実それ自体によって把握する偉大なる創造者を知るエリートにあてがわれるのに対して、詩、伝説は理解されるのに利点を持っている。

ストラボンはエクメーネを記述するが、大地全体は記述しない。なぜならストラボンは天文学と幾何学によって解明された残りの世界を考慮にいれずに、人間が居住する世界を支配しようとしているからである。ストラボン自身がいかなる地図も描かなかったのはこのためである。反対にストラボンはエラトステネスによって提案された現出した大地のイメージを議論している。

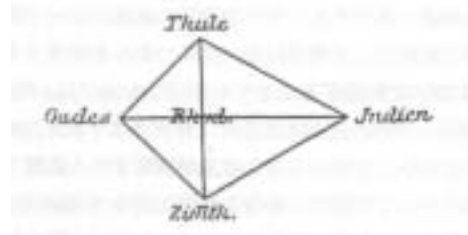


図 6 エラトステネスによるエクメーネ：表層のためのモデル

(引用：H.ベルガー、ギリシャ人の科学的地理学の歴史、von veit、ライプツィヒ、1903、p.432)

特に、南半球は四つの「スプラギデス Sphragides」（長方形あるいは菱形の幾何学的な下位分割で印章学に固有の言葉）に、北半球は三つ（ギリシャ、イタリア、イベリア半島）に区分される。ストラボン自身は、河川と山によって大地の表層のさまざまな部分を区別

して記述しようとする。ストラボンは形象よりも（文字どおりの）イメージを利用する。なぜならストラボンに従うと、**ロゴス=自然**、すなわち休みなく増大する（それゆえに自己変換する）何かの問題だからである。

表象の様式というこの問いは、古代の地理学的総合を行い、ストラボンについて語らなかったプトレマイオスによって再び提起されるだろう。したがってストラボンは自ら引き起こした危機の前に成功することはなかった。

人文主義とルネッサンス、さらにのちの19世紀前半ドイツの批判的地理学は、ストラボンと「人文主義」地理学のあらゆる問題を再発見するようになる。つまり言語の現実への関係、地理学者の意識という問題である。哲学者のようにそれを読まなければならず、「我々のありきたりな現代地理学の要求のため」の原資料としてそれをを用いてはならない。しかしながら同時に、地理学の近代性の歴史、近代地理学の知の歴史が、実際には古代の問いの再発見の歴史であるということに我々は気づくだろう。

10. ストラボンあるいは両義性について：言語と現実、シニフィアンとシニフィエ

まずなによりも、今までの私の説明のなかで多少とも不可思議な側面がストラボンから浮き彫りにされねばならない。ストラボンによって地理学のなかに地理学者の意識という問題、地理学者自身とその知、そしてその知の本質と目的性に関する地理学者の省察という問題が生じたと私は言った。ストラボンによって、我々が地理学者の意識（より精確には自己意識）を具体化する創始者と関わり合っていること、そして地理学が空間の支配を可能にする学問であり、政治的な企図に従う認識、つまり**戦略的な知**でなければならない学問だということ、を我々は既に語ってきた。同時に現実と言語の間に存在する関係という問題が提起される。我々はその間に地理学的知の内部で**ロゴスのデッサンに対する最も強力な支配**の瞬間を見ることになる。確かにストラボンの根本的な両義性を見失ってはならない。つまりストラボンにとって地理学者の仕事は地図を描くことであり、自らは作製しなかった地図の叙

述に割かれた17巻を作成したという事実である。

ストラボンは地図の厳密性を言葉によって打ち砕くことになるが、彼の目には**ロゴス（言説）が現実、自然である**。それは全ての人々がその上に基礎づけられる規則である。問いの全体はこの規則を捕捉し、それを描写することである。言語と現実の関係という問い、それは現代地理学における近代性の問いである。現在のスイス地理学において、ストラボンによって提起された問題に近年取り組んでいるクロード・ラフェスタンとジャン＝ベルナル・ラシーヌを挙げることができるだろう。ストラボンは地理学において現実を言語から切り離すことができないことを見た最初の人物である。「私の言語の限界が私の世界の限界である」と書いた時のヴィトゲンシュタインのような今世紀の言語哲学者たちを読み直そう。言語と世界のこうした一致は、世界を構成する手段として言語を確立する。我々の言語が我々の世界から我々を切り離すことを禁じている。

以上のことは、ストラボンにとって問題が大地の全体を記述することにあつたのではなく、人間が住んでいる世界、エクメーネだけを記述することにあつたことから生じる。したがって科学の視線と同様に政治活動に固有の要求にとって、為すべき最初の最も重要なことは、地理的地図、地球の境界の中にあるありとあらゆるものに対して、最も単純な可能な形態と次元を示そうとすることである。地球が、その各々がひとつのエクメーネを形成する4部分に分割されるとしたら、「**チョウセンアザミの頭**」（地球回転楕円体の上部）の叙述は別の科学の範疇に含まれる。「その部分は確かに我々人間によって居住されていない。したがって妥当性を持つ他の居住世界の存在を仮定しなければならない。しかしながら我々が語るべきことは我々についてだけである。」無視されていることについて語ることはできず、そのための言語を我々は持たない。それは言語哲学が両大戦間に再発見しつつあつた事実である。

近代的、哲学的な言葉で、別の言語学の世界が存在するが、ストラボンが没頭することになったのは、その固有の世界の叙述、人々が同じ言葉を話す居住世界の叙述である。この立場は（ストラボンが完全に依拠していた）ストア学派の哲学から生じるが、この哲学は言語と現実の間の関係について、問題を含んだ特徴を明らかにしていた。ストラボンが言語について採用した前提的な立場の結果として、権力に応じて地理学

的知の有効性の関係が解釈される。つまりその立場によると、「すべての舞台」(知であり同時に権力でもある人間のエクメーネ)は行為、操作によってのみ理解されるのであって、したがって言語は現実と緊密に関連づけられる。

ストラボンはその作品のなかで、ヘゲモニーの概念と政治の概念を区別している。すべての政治的なものがヘゲモニーから生じる。しかしながらヘゲモニーは政治権力の直接的な行為である。だが政治はより広大な空間であり、そのなかに権力によって計算されない行為の結果が含まれる。権力の間接的な影響。あらゆるヘゲモニー的行為は、権力をもった人間のA・プリオリな支配には服さないさまざまな政治的結果を生み出すことになる。ストラボンが自らの位置づけるのは、ヘゲモニーと政治の間のこの空間、この距離の中である。

政治は言語、言語的關係の上に創設される。現実(そこには科学的なものが含まれる)とは原理的に社会的現実であり、それはすなわち関係、つまり意見や情報の交換、したがって言葉の交換の上に根拠付けられる。それゆえに言葉はまた政治的支配を構成する。ヘゲモニーが権力の行為であるとしたら、政治とは言説の世界で権力の行為を「再理解すること」である。

ストラボンが知と権力の間に織りなした緊密な関係は、我々の言語が我々に認識させることだけを我々は理解するという我々の能力によって説明される。だがそれは機械的な関係ではない。そしてこの関係は、権力に直接的に利用される知を供給するというストラボンの意志から生じるのではなく、その哲学的な位置、つまり我々の言語が構成できるような世界、エクメーネから外に出ることが孕む不可能性から生じるのである。ストラボンが自らの叙述とエクメーネを一致させなければならなかったのは明らかである。なぜなら可能性はストラボンに、言語という社会的つながりの限界を侵犯させないからである。

我々がこの講義の後半で見るように、近代的なものは地図による言説の漸進的な植民地化を行った。この植民地化から、我々は重大な帰結をもたらす信念、すなわち言葉のシニフィエが固定されるという信念を引き継いできた。それは明らかに正しくない。なぜなら、言説の意味は言葉のシニフィエの揺れ(あるいは浮遊)に密接に依存しているからである。両義性という非常

に曖昧な用語でしばしば意味されるこうした現実を確認することなく、ヘーゲルあるいは前世紀のドイツ哲学全体を読むことはできない(N.ジョージ・ジュスク・レーゲンが「弁証法的薄明」という言葉によって意味すること)。結局のところストラボンの両義性は、最終的には一義的でありかつ曖昧である言語の両義性であり、言語と現実の間の連関という問題を含んだ局面にある。言葉の意味の一意性の中でのこうした信念は、それ以来我々が地図を判読するように書物を読むという事実から生じる。

言語の限界を明らかにしたストア学派によって、言葉と世界との間の両義性あるいは空隙(唯名論者の場合のような言葉と物の間にもはやない空隙)が、地理学者という仕事の存在論的な位置になる。権力に対して直ちに有用な地理的知を生産するというストラボンの意志だけが考えられているのであれば、ストラボンの読解は、極めて平凡なものになる。こうした読解はストア学派の哲学的な基盤全体を隠蔽する。その理由は、その言語と、ローマ帝国として叙述されることになる世界の間を区別できないからである。

叙述の限界は言語の限界である(ラテン語を話す/異邦の言葉を話す)。こうした言語(シニフィアン)の多元性は、ロゴス(シニフィエ)、すなわち世界の規則の一意性と対立する。したがってすべての言説、すべてのパロールが、そのシニフィアンに還元される。それは異邦人の言葉を翻訳するという単純な問題ではない。世界のある見方を別の見方に翻訳することが問題となる。

私は、多くの記号学者がシニフィアンとシニフィエの間の区分に対するストア学派の貢献という私の見解に異議を唱えると思う。しかしながらこの貢献はストラボンにおいて明らかであり、明示化されている。近年、計量地理学の危機の結果として展開してきたフランス語圏とアングロサクソンの地理学は、根本的には言語と現実の間のこの問題を含んだ関係に依拠している。このことから我々はストラボンとともに地理学思想の総括を見いだすと主張せねばならない。我々はい下で、近代人がストラボンの理解に関してあまりにも凡庸であることを見るだろう。近代地理学を凡庸さと陳腐さから脱出させることができるのは、ストラボンの哲学的な(地理学的ではない)読解によるしかない。近代人の理解が、ブトレマイオスの理解と同じく、そ

の全体を把握せずに錯覚に陥っているとしたら、ストラボンの再理解が、プトレマイオスの読解を通して始まるしかないことは間違いない。

11. プトレマイオスの沈黙，あるいは言説の死

エジプト人のクロード・プトレマイオスは古代古典時代の最後の偉大な地理学者である。彼は2世紀中葉に古典的知の統合であるひとつの地理学を書くことになる。しかしながらそこにストラボンについて一言も見当たらない。プトレマイオスは近代の地理学を宣言する。プトレマイオスは多くの作品の著者であり、そのなかにはギリシャ語の絶対最上級「Mégistos」(非常に大きい)がアラビア語翻訳された『天文学大全 Al Mageste』という大論もあるが、その論は中世において西洋から姿を消していた。

確かに西洋文化は(アリストテレス以後)最も多くのもをプトレマイオスに負っている。西洋的(東洋的もまた)世界観は、コペルニクス(16世紀半)までプトレマイオス的な見方であった。世界のその偉大な統合のなかで数学的水準で示された地球中心の見方。

天文学大全以降、西洋文化に最も衝撃を与えたプトレマイオスの作品は、間違いなくその地理学であり、それは計量地理学の創始者の作品である。最初にプトレマイオスは計量的関係のためにロゴスを体系的に排除した。その作品が時代を越えて知られてきたという高い評価を見ると、我々はそのことを理解できる。つまり中世における古典文化の衰退が終わって、プトレマイオスの作品は近代初頭に(特にアラビア語の翻訳のおかげで)再びその姿を現すことになる。プトレマイオスは、その時代最大の知識人の一人であったロツテルダムのエラスムスによって1533年にその作品が出版された後、西洋文化における古典となった。直ちにその後、プトレマイオスは危機に陥った。なぜなら新世界は彼の地図の外側に位置していたからである。しかしながらこの時代のあらゆる探検は、プトレマイオスを解釈することに基づいている。(リュシュイによる)14世紀末のヴェネチア版は、アメリカ全体を含んでいた。

偉大な航海者たちによるプトレマイオスの大々的な利用についての大きな矛盾は、その地理学が実際には

地中海に限定されていたということにあった。プトレマイオスのエクメーネは、14番目の南の平行線を越えて広がっていない。またプトレマイオスはギニア湾を認識していない。南には砂漠、空虚がある。15~16世紀の問題は、既知の世界の拡張に、プトレマイオスの資料を適用することであった。プトレマイオスの地理学は8巻から構成されており、序論と7冊のテキスト、そして地図からなっていることを思い起こさねばならない。7冊は8,000ヶ所(地名)の純粋なカタログである。いかなる記述(ストラボンの場合)も付け加えられていない。ただ要素の名前だけが表示され(都市、河川、山...),それに二つの数字が添えられている。その数字の対とは経度と緯度、すなわち赤道と基準子午線からの距離である。一対の座標が数学的な格子の内部に地理学的対象を位置づける。これが近代地理学の実践である。しかしながら15世紀初頭にそれが新たに再発見されるのは、まさにこの理由からである。つまりこの構造づけられた(そして地域化されていない)情報が、すべての空間にとって有効なものになる(図7)。

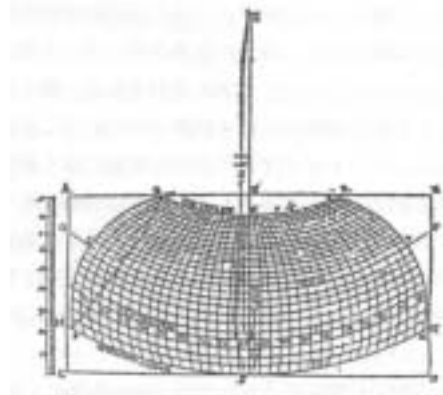


図7 プトレマイオスの(第二)投射図

それはまさに必要とされていた世界の地理学的記述の方法である。大地の表面の科学的還元の技法が、その投影システムを通してプトレマイオスによって教授された。したがってプトレマイオスの理論は、数学的空間の初歩的な構築の上に基礎づけられる。それは言葉の十全な意味で現実的なものの抽象化(「more mathematicarum」)であり、正確さを獲得することである。プトレマイオスの第1巻の論争は、地図の「修

正」(あるいは「*Diorthôsis*」)の張本人であるマリノ・ディ・ティロの作品に対して向けられる。実際にマリノは格子を用いた地表面の叙述を提案した最初の人物であるが、その格子は正規直交であった。マリノについては、プトレマイオスが語ったことしか知られていない。なぜなら彼の作品は失われてしまったからである。マリノが強い関心を持っていた方法が採用されたならば、すぐれた数学者であったマリノは、投影問題を解決したであろう。つまりそれは地図面上に地球の回転楕円体の形態を、大きく歪めずに変換することである。

プトレマイオスの企図は、距離の計算が簡単になるようなデッサンを確立することにある。中世以後そして近代初期の世紀の間、もはや経度が計算できなくなり、その方法は忘れられていた。プトレマイオスの地理学の妥当性は、その資料よりもはるか後まで残ることになる。なぜならプトレマイオスの経度の計算技術は、18世紀でさえ優越性をもっていたからである(航海における機械式時計の利用の出現)あらゆる海図法は厳密で唯一の座標空間上に確立された。したがって距離はもはや帆船の日数ではなくて、海里をもって語られる。つまりそれはエクメーネの偶有性の絶対的、抽象的な指標であり、既知の世界全体の中での有効な指標となる。プトレマイオスの資料全体が、誤りはあるとしても同じ空間の内部で計算されていることは真実である。プトレマイオスの方法は間違いなく絶対空間の地表面への投影であり、この空間は外部からやってきて世界の上に置かれることになる。そして古典的なエクメーネの各点を数学的に二重に決定するという論理的帰結によって、それは大きな利点を持つことになる。

ところで平行線はギリシャ語の「*parallelos*」に由来するが、この言葉は、置換可能な、同様な、**等価な**、を意味する。ゆえに我々は量の等価性の空間にいる。あらゆる性質が地理学から追放され、地理学は量の科学となる。それはプトレマイオスが地理学と地誌学 *chorographie* (あるいは *topographie*) を区別する時に、その作品の最初で主張したことである。コロス *Choros* とトポス *Topos* は、それぞれギリシャ語で**地域** *région* と**局地性** *localité* を意味している。地理学は大地(その「量」)のデッサンの模写であって、大地の文字どおりのデッサンではない。大地の文字どおりのデ

ッサンは地誌学、すなわち質的な形姿、画家たちが作成できるような大地のデッサンあるいはタブロー(表)に属する。景観のタブローは大地のデッサンであり、地理学はこのデッサンの模写である。それゆえに大地の地理学的形象は、物の性質、物の価値に関する情報ではなく、抽象化、シンボル、物の量を描く記号に基礎づけられる。プトレマイオスによれば、地理学は現実への数学的な関係であり、地図の模写である。

したがってこうした構想はストラボンのそれとは全く異質であり、ストラボンの目には地理学/地誌学の対立は根拠がない。つまり量あるいは質に優越性を与えようと、いずれにしてもまえもってある還元がなされている。プトレマイオスとは反対に、ストラボンはこの対立を論証する必要性を感じなかった。プトレマイオスの校訂者たちは、プトレマイオスがストラボンを全く引用していないことを確認して、常に驚く。今はこの沈黙を簡単に理解できる。その最初の立場の決定から、プトレマイオスは、言説をあらかじめ選択すること(ストラボンの地理学のような)、換言すれば言語と現実の間関係の問題の上に構築されるあらゆる地理学を一掃するからである。プトレマイオスによって、言説が覆い隠される。しかしながら結局のところ両者はひとつの抽象から出発する。だが両者の根本的な対立は、一方が「科学的」であり、自分自身に閉じこもることになるのに対して、もう一方が哲学的な性質をもつという事実にある。

プトレマイオスは複数の地球を構成できることを知っていた。この点に関して、イタリア語に示唆的な表現がある。我々の疑念、我々が嘘とみなすことに対して不信を表現するために、「*C'est une balle*」という。この表現の(今日忘却された)起源は、最初の「球体」、つまり世界図にさかのぼるのは確かである。明らかにこの時代の人たちは、この世界図を信じていることができなかった。人間がその上を歩いている土地が同時にその人間の前に存在することを、どうやって理解するのか? この最初の地球を前にして、その同時代人たちは「*C'est une balle*」と言うことで、自分たちの不信を示している。本当のことを言えば、プトレマイオスにとって地球を構成することは現実的、実用的ではない(現実的な利用のために必要なその尺度のゆえに)地図は非常に容易に利用される。したがってプトレマイオスは地図学的表象のゆがみを抑えるための投影シス

テムを確立した。「真の」科学的な表象が地図である。円形の大地は、それをより良く計算するために、空間をより良く制御するために平板となる。我々はここで二重の抽象化の前にいる。最初は元来の抽象化であり、次に平面上に地球の湾曲を翻訳する抽象化である。

したがって地理学的知の本質という問いはもはや提起されないし、知と権力との関係、イメージと意味の間の関係という問いも提起されない。実践的な地理学、前世紀のドイツ地理学において「測量地理学 Messende Geographie」と呼ばれていた地理学、つまり大地の測定としての地理学が行われる。さらに抽象化によって、沈黙のうちにひとつの重要な存在論的転換が完成されるのであり、それは魔術師の真の転回である。

12.《盛名劇団》から《世界劇場》へ：あるいは役割の逆転

モリエールの『タルチェフ』¹²⁾の終わりで、(「中央に見る」)王の警吏が舞台上がって、次のように宣言する。「我々は詐欺を目の敵とされる国王陛下の下に生きているのです。…そしていかなるいかさま師の術策をもってしても、これをあざむくことはできません。」このエピローグの中で、詐欺師が再発見されるのが目撃される。国王は、知らないと思なされていたことを既に知っていた。観客たちは実際には自分自身を観察されるのである。役割の逆転。

プトレマイオスの企図によって、観客、つまりこのように自ら信じていた **観る人間**が実際には**観られる人間**に転換させられる。近代(プトレマイオスが再発見される時代)とともに、**トリック**が明確なものになる。**この逆転の手段のひとつは線遠近法である。**(しかし直線とは異なる形式の下で 古代人に知られている)遠近法は、平面上に奥行きを表象することを可能にする限りで、ひとつのトリックである。これは無限空間の内部に大地の物を概念化することである。とりわけ窓にガラスがはめられ始めたのは16世紀になってからであり、ガラスはまさに背後にあるものが奥行きで 現れるようになる表面となる。窓を通して見られる世界は、線遠近法の世界、地図の世界であり、無限の空虚な空間における消失点である。直線は世界、都市、地図の構成規則として必要不可欠なものとなる。

タブロー景観が現実のモデルとしてふるまう。

しかしながら古代人になじみある遠近法は、しばしば忘却されているが(ユークリッドの第8定理を見よ) **線遠近法ではなく角度の遠近法であって、自然的であって人工的ではない。対象の次元は反対に観る角度に比例するのであり、距離に比例するのではない。**したがって対象の次元は、その位置の関数であって、線遠近法の場合のような観客者との関係による距離の関数ではない。

ローマ劇場に関してウィトルウィス Vitruve によって描かれた舞台の設計図(図8)は、プトレマイオスの投影と非常に強い類似性を示している。イメージに戻ると、物の逆転が見いだされる。観察点(視線が発する点)は舞台の中央にある。見かけ上の役割とは逆に、観察者は役者になり、観察される側が平土間にいる観客となる。観客は役者に**観られる**。モンテスキューだけがこの逆転に気づいていた。『ペルシャ人の手紙』(1721)¹³⁾のなかに次のような文章がある。「私はきのうはかなり奇妙なものを見た。もっともこれはバリーでは毎日行われていることなのだが。町中の人々が夕食が終わる頃になると集まってきて、私が聞いたところでは**演劇 comédie** とか呼ばれる一種の芝居をしに行くのだ。主な動作は、**舞台 tréâtre** と呼ばれる演壇でおこなわれている。両脇には**棧敷席**と呼ばれる小さな奥まった場所で、男女がだんまりの芝居を共演しているのが見える…。下の方には一群の人々が立っており、舞台の上にいる人々をからかい、後者もまた下にいる人たちをあざ笑っている。」

アブラハム・オルテリウスは自分の地図帳に、『Theatrum Orbis Terrarum』という表題を付けた。そしてエルウィン・パノフスキーは『象徴形式としての遠近法』(1927)¹⁴⁾のなかで、古代人が視線になかった遠近法をどのようにして知ったのかを説明している。つまり網膜像が曲線であり、古代人は眼底の像を支配する線が直線的ではないことを強く信じていた。ユークリッドはその第8定理のなかで以下のことを注意している。事実、観る人の目にとって異なった距離に位置づけられた同一の大きさの二つの対象は、距離に反比例するのではなく、**角度の関数として現れる。**ユークリッドにとって、本質は対象の位置にあるのに対して、近代の人々にとってそれは距離である。地図学の「進歩」は、自然的な(曲線の)遠近法から線的遠近

法への転換によって特徴づけられる。近代地図学は固定された不動の観る人を含意している。つまり我々が遠近法とパベル・フローレンスキの機制に関して説明したような麻痺した「クラレ中毒」である。

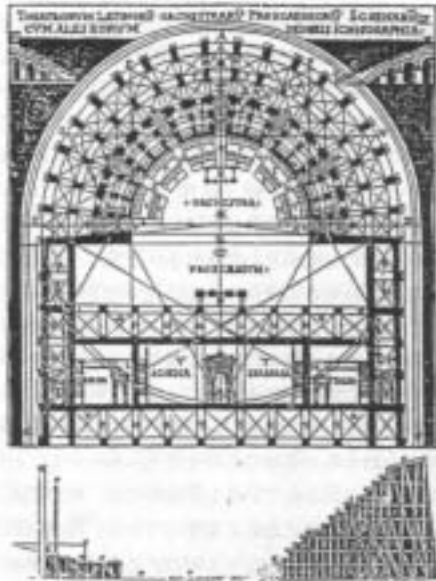


図8 ウィトルウィス以後のローマ劇場

プトレマイオスにとって、地図は世界図(「balle」)よりも優れている。なぜなら地図の場合に観る人は固定されているだけでなく、作用の外にいるからである。地図とは空間を同質的、等方的、連続的な空間に還元することである。その投影は、地図の内部自体に網膜像を書き込むことを目指している。いまやユークリッドの第8定理は忘却されるが、この定理がルネッサンスに再発見された時、それは線遠近法を益々確固たるものとしている世界のなかでひとつのパニックとなった。この線遠近法は、連続的で、同質的で、等方的な...空間、「クトニエ」とは反対のあらゆるものに、地表空間を翻訳することを可能にするのである。

「地図による」地理学とは量の地理学であり、質は(多少どうでもよい)地誌学へと残されることになった。奇妙なことに、道路は18世紀以前(あるいは17世紀中葉)には地図上に体系的に表現されなかった。現在では最も正確な地図が道路図であるだけになおさら奇妙なことである。ひとつの例外はプーティンガー

Peutingerのタブローである。それはローマに起源を有し、ルネッサンスに再発見されたもので、ローマ帝国の一種のトポロジーであり、道路と行程を描いた最初の「近代的な」事例である。そこには例外もあるが、それは道路がしばしば河川と混同されているという事実である。道路は水の流れから切り離された瞬間、直線となる時に、地図上に現れる。世界を支配する原理が迅速さという原理になり始める時、道路は「直線」となる。つまり距離が経済活動を支配するのである。鉄道はさらに一層、直線的なルートを表示し、高速道路はこの論理の最近の帰結である。しかしながらそれにはひとつのパラドクスが伴っている。なぜなら高速道路は都市を結ぶために考案されているが、都市を避けることになるからである。都市は移動に対する障害となる。

ハイデッガーに従えば、近代は世界像の時代である。しかしながら、地図学と同じことである線遠近法を直接的に応用することにおいて、と付け加えられねばならない。距離 時間が基本的なものとなる。さて現在、線形性(線遠近法に含まれる原理)はもはや根拠のあるものではない。空間の情報通信化と情報化によって、迅速さの原理が常態になるが、それは線形性の原理ではない。すべての情報通信網が示すように、時間上の最短経路はもはや距離上の最短ではない。それは近代性の終焉である。ここで近代性の像として近代性の生産を示すイメージを見てみよう。それはファン・フェルメールの《地理学者》(図9)である。窓は、結局のところアレゴリーによって地図の座標を表象する格子となっている。使用されている道具のなかにコンパスがある。コンパスは比率を測定し、距離を対象の大きさに一致するために用いられる。世界図は片隅に整理されることになる。

13. 「ドイツ国家地理学」: 貴族 封建的地理学

別の図(図10)は、まだ貴族 封建的であった時代、18世紀後半の「ドイツ Deutschland」、つまりドイツと呼ばれる土地に関する地理のドイツ語の提要から引用されたタブロー(表)である。一覧表/格子の原理が再発見される。アンシャンレジュームの王国の資源目録が問題となる。タブローのタイトルは空間を意味

「デッサン」(地図)が地理学的な実践の中に隠されてきたのかを示そうと試みてきた。そして「トリック」、つまり幻想の働きから創り出される技術的な方法によって特徴づけられる直線遠近法が、地理学者が世界に接近するやり方の「調整器」となる。

同様に私は、最初の近代的な世界地図であるオルテリウスの『Theatrum Orbis Terrarum』が組織した逆転に基づく演者と観客の間の役割の逆転を強調してきた。こうした面ではひそかにデッサンが、それ以後すべての言説を奪われた地理学に対してその規則を強制することになるであろう。

フランス地理学史の父、フランソワ・ド・ダンヴィル Francois de Dainville の目に映るその証拠は、18世紀後半でさえ西洋文化の中で「地理学者」という名称が発見されず、ただ「地図学者」という名称だけがみいだされるという事実にある。地理学は地図学的知に還元される。フェルメールの「地理学者」もまたそうした還元の欲望を表している。

いま私は、地理学の今日の歴史にとってひとつの重大な帰結に関心を引き寄せたい。地理学全体がデッサン(特に遠近法)によって密かに支配されているという事実が、地理学思想のなかに記憶喪失を生み出したつある。我々は言説と記憶の間に同一性、一致が存在することを既に指摘していた。したがって地理学の記憶喪失は言説を「殺害する」ことである。

ここに現代地理学において再び見いだされるこの記憶喪失(つまり認識論的省察の欠如)について二つの事例がある。

a) アメリカの地理学者 イーフー・トゥアンは次のように問うている¹⁵⁾。幾何学的空間が非常に洗練された空間であり、それが人類史の比較的最近の時代に属するとしたら、幾何学的空間になる以前に人類の目に空間とはどのようなものであったのだろうか? またトゥアンが、「人文主義地理学」(文字どおりの人文主義あるいはポスト計量地理学)に属すること、遠近法の制約から そうとは知らずに 自由になることを望んでいたのを想起しよう。そこに記憶喪失の記号がある。なぜなら定式化されるべき問題はむしろ次のようになるからである。つまり地理的空間はユークリッド幾何学の空間といかなる契機によって一致したのか? 次のように答えることができるだろう。近代そしてブトレマイオスの再発見によって、つまり投影の働き、

直線遠近法の平面への翻訳によって。

b) J.=Cl.ミュラーが『L'Espace géographique』¹⁶⁾に最近、次のように書いている。地理学の対象は景観であるので、地理学者はユークリッド幾何学をやむを得ず受け入れている。新たに問いは転倒されねばならない。なぜならまさに地理学の歴史において「景観」という概念の利用を生じさせたのが幾何学的空間の独裁だからである。ミュラーが強調するように、地理的景観は幾何学的空間の独裁の産物であってその逆ではない。なぜならそれは地図学的デッサンの理想化とその現実に対する応用の結果だからである。

したがって地理学に関する「記憶喪失以後」の現在の問題全体が整理分類され、転倒されるだろう。この置換の過程を明らかにするために、あまりにも忘却されてしまったひとつの歴史が語られねばならない。それは重要であり、今日の地理学の記憶の欠如をもう一度証明する。この歴史は18世紀にドイツで展開されたが、今世紀にハンノ・ベックだけがその記憶を保持している。

14. 「ブルジョワ」地理学の誕生

これから語ることになる「純粋 Reine 地理学」はドイツにおけるブルジョワ地理学の最初の形態である。お好みならば、「市民地理学 géographie civile」と言うこともできよう。つまりブルジョワと同時に市民も意味するドイツ語の「Bürgerlich」の翻訳であり、貴族制と封建制に対立するすべてを意味する(グリム兄弟の辞書を参照のこと)。それはイデオロギー的な翻訳ではなく文字通りの翻訳である。《Reine》は今度は《pure》を意味する。

18世紀のドイツ地理学の歴史がなぜそんなに重要なのか? 「純粋地理学」によって、地理学者の一部が地理学的思考に対する地図学の支配から、自らを解放しようとする最初の試みが目撃される(言説の不在、デッサンの独裁、地図学的知への規範的な還元という意味における地図学の支配)。フェルメールの絵画上で、地理学者は君主の助言者の部屋に閉じこめられている。それは貴族・封建的地理学の表象であり、そこで地理学者は、デッサンを通して領土の「イメージ」を描く。

「領土 territoire」という言葉の語源は「大地 terre」

ではなく、「圧制 *terreur*」に由来する。「領土」という言葉の起源に「圧制」という言葉がある。なぜなら領土は支配という政治的機能によって境界づけられ定位された空間だからである。先ほどみた貴族 封建的タブローの上で、空間は領土としてのみ存在する。すなわち政治空間としてのみ存在するのであり、空間の別の定義はない。

近代地理学の歴史を論じる書物や教科書の大部分は、以上のことを 19 世紀末と一致させる。しかしこの歴史がもっと早く、18 世紀初頭に始まるとはいえないだろうか。この歴史は封建体制が最も強固であったドイツにおいて展開される。

したがってこの歴史は、1726 年に『*Commentatio de Vero Geographiae Methodo*』というラテン語タイトルの小冊子の出版によって始まる。『地理学の真の方法についての試論』は、ポリカルプス・レイザー Polycarpus Leyser によって著された。**地理学的記述の秩序**を対象にした唯一かつユニークな提案を携えた一冊の非常に小さな書物が問題となる。地球の表面をいかにして記述するか？

著者はその時代に用いられていた二つの秩序、つまり**アルファベットの秩序**と**政治的秩序**を批判することからはじめる。この二つの記述型は、同時に二つの言説でありまた実践であった。最も単純なのがアルファベットの秩序であった。そしてポリカルプス・レイザーは科学的秩序が問題になりうると宣言する。もうひとつの秩序は政治的秩序、つまり政治空間、領土、行政単位の議論に限定された記述であった。レイザーはこの第二の論理が科学的言説に応用できないものであると今一度反論する。なぜならあらゆる政治的境界(国境)は、さまざまな出来事(戦争、結婚など)に応じて変化するからである。地理学者はこうした秩序に基づいて地理学的記述を開始し終了する時間をもたない。もはやすでに領土は同一ではなくなっているのだから。ついでながら、国境は常に大きく変動しており、ナポレオン時代にその絶頂期に達しているが、この時代間にヨーロッパの政治空間は完全に統制を失って、再組織化された。

19 世紀初頭にこの地理学は消失する運命にあったように思われる。地理学的知の生産の中心地であったワイマルが、**今後は地理学を行うことは不可能である**ことを理由としてその出版を中止した。時間的なパラ

ダイムによってこれらの物を記述する学問である歴史は残った。しかしながら空間的な観点の地理学はその道程を終えたように思われた(政治空間以外の別の空間は存在しないことを想起しよう)。

ポリカルプス・レイザーはその試論のなかで、これらすべての問いを提起し、また同時に哲学者ウオルフは地理学の死を宣言していた。地理学者たちは曆を記述したほうがよいだろう。ここに「ブルジョワ地理学」の起源がある(お好みならば我々の地理学)。それは最初から、非常に「神経質で」、複雑で、精緻で、また現在考えられるよりもはるかに敏感な地理学である。

しかしながら結局のところレイザーの地理学の賭金は何なのか？ それに答えるためには、レイザーが地理学者共同体に示した提案、つまり「第三の秩序」(ブルジョワ的秩序)を検討しなければならない。彼は第三の「論理」、つまり**自然的論理**を提案する。もはやアルファベットの秩序(地理学「事典」の秩序)でも政治的秩序(政治空間の境界によって決定される)でもない「自然的地理学」、つまり**政治境界ではなくて、河川や山といった自然境界に基づく地表空間の記述**である。

この手続きの利点は何だったのか？ 山と河川は政治的秩序やアルファベットの秩序から独立した固定された要素であり、したがってこれらの要素は権力の交替や戦争のたびごとに絶えず再び始める必要がなく、記述することができる。

にもかかわらずこの提案は、王の地理学者とブルジョワ的地理学者の間に非常に激しい論争、真の闘いを起こした。フランスで《啓蒙の世紀》と命名されているあらゆることが、ドイツにおいてこの争いのなかに含まれることになる。

一見して、レイザーの提案は非常に単純であり、良識によって決められているといえ、非常に機能的であるように思われる。しかしながら「国家地理学者」あるいはアンシャンレジームの地理学者たちが別のところで示しているように、この提案は**破壊的**であり、損害を与えるものであったことに注意しなければならない。しかしながらなぜ「**純粋地理学**」という名称なのだろうか？ レイザーは、もはや「領土」(政治空間としての地理空間)ではなく、「自然空間」という別の空間形態を対象とする記述を提案するために、ただ単に政治権力の意味作用を地理学的知から切り離す。だが政治的観点から、それは認めることができない記述で

ある。なぜならそのような記述は利用できないからである。「純粹 reine」という言葉は、こうした意識によって決定されている。地理学的知の「中立性」という提案の起源は、レイザーのこの作品のなかにある。これらの提案は、10年後（おそらく1752年から1756年の間）に世界の山の体系図を制作したフィリップ・ブアシェ P.Buache によって再度取り上げられることになる。この地図上には政治境界は現れず、自然境界つまり山と河川だけが現れる。

今日我々はイタリアにおいてさまざまな「自然空間」を読むことに慣れており、また学校で自然境界として自国の（政治）境界を認識するように訓練されている。これらの様相が我々にとって自明のように思われるとしたら、それがブルジョワ地理学の最も重要な獲得物、すなわち世界（あるいは地球の空間）を自然空間としてみることであったことが強調されねばならない。反対に、貴族 - 封建的地理学にとって領土だけが存在したのであり、領土に関心を寄せる科学は「国家学（誌）Staatskunde」と呼ばれた。そこに世界観および地理空間の最初で最大の構造変動がある。空間のある様相を別の様相へと置換すること、あるいはアンシャンレージュの地理学からブルジョワ地理学へと移行すること。

15. 空間と社会

貴族 封建的地理学による批判が直ちに始まり、ドイツ地理学にとって18世紀全体がこの論争によって特徴づけられた。とりわけ辛辣な二人の著者が、レイザーの提案に反対した。結局、G.K.ヘリング Hering とハウバー-Hauber がレイザーの作品に反対する小冊子を出版した。これらのテキストは全く反対のこの上に基づけられていた。ヘリングは次のように語る。「ブルジョワ」地理学者たちは常軌を逸している。なぜなら、これらの地理学者たちは存在していない何かの存在を主張しているからである。つまり彼らは自然空間を名付けることを欲している。そこから二つの可能性が代置される。ヘリングとハウバーが語るように、ブルジョワ地理学者は存在していないものに依拠するので常軌を逸しているか、あるいは彼らの目的が最初に宣言されたこととは別にあるかである。ブルジョワ

地理学者たちは既存の秩序の破壊、あるいは既存の秩序を別の秩序によって置き換えることを企てており、彼らは破壊者であり、転覆者である。地理学をあらゆる政治問題から切り離すこと、まさにここにブルジョワ地理学の手続きの巧妙さがある。その要求は公式のプランの上では文句のつけようがない。自然空間に適用され、政治権力にとって有用ではないひとつの地理学を創出すること。ひとつの地理学の創出が要求の形式であったが、王の地理学者たちは直ちに「純粹地理学」の隠された意図、すなわち既存の秩序を別の秩序に置き換えることを理解する。政治に対して科学の自立性を要求することは、実際には別の（政治的）企図へ必然的に移行することになる。

前世紀前半のドイツを研究したドイツの歴史学者ライnhルト・コゼレック R.Kosellek は、『批判と危機』と命名された書物のなかで、ブルジョワジーによる権力の「間接的な」獲得の戦略を描いている。彼の説明は同一の分析を繰り返す。それは私がブルジョワ地理学の戦略に関する解釈に適用した過程である。つまりその要求事項をあらゆる政治形態から切り離すこと。

J.ハバースもまた《公共空間》に関する彼の主張のなかでこのことを強調していた¹⁷。18世紀と19世紀前半の間のブルジョワジーの主張は、まさに「世論 opinion public」に基づけられており、世論という領域の内部でブルジョワジーは、貴族 封建的な性質の政治支配に対して自らを組織化する。それは定義上、また私はやむを得ずと言いたいのだが、「政治的」ではない領域であり、世論を定義するものはまさに政治面での無力さであった。世論はブルジョワジーの最初の組織形態であり、ブルジョワジーは明らかに権力獲得を求めていたが、まだ権力をもっていなかった。したがって権力をいかにして獲得するのか？ それはコゼレックが「間接的な奪取」と名付けた過程によってである。この権力の獲得形態は意図を隠蔽する形態であって、その最初の手続きは、「世論」の範囲内で裁判所とし自らを任じるために、アンシャンレージュから自らを切り離すことである。

しかしながら世論とはなにか？ 具体的な事例によって答えられるであろう。今日、イタリアにおいて「道徳問題」と呼ばれることがすべての日刊紙の一面にみられる。すなわちこれは、ワインの入った壺を摘発することで権力を行使する人々を批判するが、政治権力

を持たないジャーナリストや知識人の領域である。世論（リッターは「道徳人 *sittliche Mensch*」を語る）と社会は混同されるかあるいはむしろ、世論とは今日理解されている意味で、社会に関する定義の最初の形態である。

世論の組織化は、個人宅での「学問的な集まり」、音楽会、共同での読書、コンサートなどを創設することで現れる。こうしたことすべてが、18世紀中葉にアンシャンレジームの国家と向かい合った世論と社会の領域を構成する。さまざまな政治活動を判断するための裁判所を自任する人々の意見を作ったのは、まずもって口承文化であった。

世論の組織化という方向に進むこの一般的運動と、ポリカルプス・レイザーの諸提案との間にはかなり驚くべき対称性が気づかれる。結局は同一のメカニズム、つまり政治権力に無媒介に目的づけられる知の生産に固有であるものから、まず何よりも自らを切り離すというメカニズムが問題となる。その目的は次に、見かけ上は政治的ではないが、権力を奪取し、別の権力を構築する諸条件そのものを構成する「中立性」という形式の下で、政治権力を批判することにある。明らかに直接的ではなくただ間接的な権力の獲得、それは「中立性」という契機を経なければならない。

この意味で「純粋地理学」あるいは、ある人たちが呼ぶように「*géographie vraie*」は、第一に権力に対して有用ではないことを主張する地理学である。しかしアンシャンレジームの地理学者たち（実際は官僚）が直ちに理解したように、この有用でないことは旧秩序に対する敵対性を意味していた。実際に「非政治的」、純粋的、自然的、真の界面というこの主張は、地理学に別の知の形態を対立させることを意味していた。それは自らを確立し生き残るために、別の文化を誕生させるのに必要な偽善であり、権力を獲得するためにブルジョワジーにとって必要であったのと同じ偽善である。有用性は時代で異なっている。この過程は、地理学において空間の「自然化」、一般的にはあらゆる科学の中立性の主張を経由する。

国民国家を組織化するという目標のために、その認識を自然なものにしながら、研究される空間的単位の描写の場を拡大することが重要であるといえる。そしてこの国民国家内部で、古い政治的単位を破壊しながらそれを統合することができ、そこで富や財はより早

くかつ容易に移動することができる。なぜならブルジョワジーの権利要求を支配する主要な問題は、国家内部で商品と資本の流動と自由な循環を容易にし、保証することだからである。フランスでは2世紀早く、そしてイギリスで1世紀前に生み出されたのが同一の過程であった。しかしながらこのコンテクストにおけるドイツの歴史的な遅れは、我々に正確にこのコンテクストを確認することを可能にしてくれる。

したがってブルジョワ地理学は、偽善という記号の下に生まれるようにみえる。この地理学は一つの秘密を隠蔽するが、この秘密について対立者たち（王の地理学者たち）は完全に意識していた。

それゆえに古典時代において地理学の歴史を占めていた同一の問題、同一の問いが再発見される。つまり言語活動（ランガージュ）という問い、そして特に地図学と地理学の諸関係についての問いである。

16. 言語と地理学者

国家地理学の内部で、物の存在はその地図学的なイメージの機能であり、その命名の可能性を保証すべき唯一のものであった。名前のない空間、つまり地図上に示すことのできない空間を命名する試みは、ヘリングが言ったように、常軌を逸した人の夢である。政治的な定義をもたない空間の名前は何になるのか？この空間は名前をもたなかった。なぜなら物を命名するという事実（地名学）と地図学的生産の間に機能上の関連性があり、18世紀のブルジョワ地理学がそこに到達することなく壊そうとしたのが、この関連性だからである。18世紀後半に、この不可能性を克服し、ブルジョワジーに対して「機能的」な地理学の道具化の実現を求めた出版物の全面的な開花が目撃されるが、ブルジョワジーは文字通りにそれについて語ったり、認めたりすることができず、（「政治的ではない」という意味で）科学的地理学として提示するように努力した。この地理学は19世紀後半に達成されることになるであろう。

なぜなら次の世紀に、本質的にはドイツでまず第一に「土地を記述すること *Landsbeschreibung*」、すなわち国家の記述と一致しえないし、また一致することを望まない諸地域の記述が生み出されるからである。

つまり地域を政治的枠組みから分離すること、**政治上の区分に依拠せずに大地（地球）の記述を行なえることを示すことが求められる**。この試みのなかにあるユートピア、すなわちある滑稽さがあるのがわかる。なぜならほとんど不可能な仕事が問題となっているからである。

貴族 封建的地理学において、「国家の測量 Staatsmessung」、つまり地図を通した政治空間の測定、物を数と幾何学的空間に還元すること以外にはなにもなかった。反対にブルジョワ地理学が行なう仕事は、もはや単なる測定ではなくて、その研究のなかで政治的目標を考慮しない地理学の可能性であり、その地理学は本質的に「自然地域」の記述に依拠している。

例えば、J.Ch.ガットラー-Gatterer によって 1775 年に発明された（イベリア半島に対する）「ピレネー半島」という単語のようなほとんど戯画的な言葉が引用できる。この時代の地理の教科書は、初期のブルジョワ地理学の根本的な脆弱さ、言語の水準で古い準拠枠を超えることの不可能性を示している。いかなる言語的な働きもこの克服を確実なものにできない。

しかしながら「純粋地理学」は、地図学的客体化に基づいた概念化を克服しつつある。ブルジョワ地理学によってはじめて「**関係**」概念の明らかな発展がある。それ以前の貴族・封建的地理学の（幾何学的概念に依拠した）政治空間のなかに可能な関係は存在していない。地理学者フランツ Franz の『Tabelle』を考えると、格子に現れる客体間に関係を確立するいかなる可能性もなく、計算のための場所、付加的な空間だけが存在することに気づかれるだろう。つまり各部分を認識することで、「全体」を認識することが信じられている。例えば、ある点の他の点との関係としての「位置 situation」あるいはよりふさわしく「**相対的位置 position**」は、貴族 封建的地理学の統計学的かつ幾何学的な空間において可能にならなかった。この点に関してレイザーの非常に重要な考えを引用することができる。レイザーは都市を、政治空間によってではなく、別の物との関係、すなわち長期的持続の過程のなかで自然的対象として変形されることがありうるとしても、固定された要素である地形（山）や水の流れ（河川）との関係で、記述することを選択する。

しかしながら「純粋地理学」は、次の秘密を顕わにしないという意志に基づいたひとつの矛盾に直面しつ

つある。旧秩序を新秩序へと置き換えることで、ブルジョワジーによる権力獲得を通して世界を変えたいという秘密。純粋地理学の脆弱さは、いまだに確立されていない権力に従属させられていることにある。

言語面で、政治的無力さを補うこと。つまり政治的な言語の力を打破しようとするあらゆる試みが挫折しつつあることを再認しなければならない。今日の我々にとって規範、規則となっている**地域の記述**が、その時代には**言語という道具が存在していなかったので不可能であった**。「地理学を地図学に同一化すること」に対する暗黙の批判は、地図それ自体に対する失敗した攻撃である。王の地理学者たちが「純粋地理学」の支持者たちを拒絶しようとしたのはまさに、この手段、地図によってである。つまりあなた方が記述しようとしていることを（地図上で）探してみなさいと。地図上に自然空間は存在しない。世紀（18世紀）末でさえ、自然空間に新しい名前を見いだすためのあらゆる試みは、ブルジョワジー地理学者の政治面での無力さゆえに挫折するだろう。**別の地理学**のおかげで、「純粋地理学」の諸矛盾が克服される時期は、「**地理学 Erdkunde**」というアレクサンダー・フォン・フンボルトとカール・リッターの名前によって刻印されるであろう時代においてである。「地理学」は「地理学 Géographie」と体系上で対立するであろう。もはや大地の表面の「**デッサン**」、**「記述 graphie**」ではなくて、深層での大地の認識（語り）あるいはむしろ再-認識が問題である（「地球 Erde = 地下の意味を持った大地」）。アレクサンダー・フォン・フンボルトは「地理学」を「**大地の批判理論**」として定義する。そしてフリードリヒ・ラッツェルがその最後の代表者となるであろう。

17. 言説への回帰：地理学あるいは大地の再 認識

地理学という言葉は、Erde:géo と Kunde:graphie という二つの部分から構成されている。しかしながら地理学は実際には地理学と対立する。第一級の歴史家のひとりであるドイツの批判的 critique 地理学者 J.C. リューデ Lüdde によって提案された地理学の定義がある。リューデは地理学に関する書物を 2 冊著わし、地理学をまず《**単純（地理的）記述（géo）graphie**》によって表現される非常に複雑なロゴス、言説》として定

義する(1841年)。ドイツでは19世紀前半に、この批判的地理学によって地図学的エクリチュールに対する言説の優位性の回復がみられる。

つまり大地 *Erde* は、「*géo*」、つまり大地の表面ではない。それは深層、深み、鉛直性である。Kunde とは、語りと物語としての認識を意味する接尾語である。したがって語源的に地理学は、深み、深層へと向かうなにかを意味する(「ガイア」と「クトニエ」を参照)。地理学者に関する肖像は、真の認識論的断絶が問題であることをはっきりと示している。



図 13 フンボルトの最後の肖像



図 11 若き日のフンボルト



図 12 カール・リッター



図 14 カール・ハウスホーファー

アレクサンダー・フォン・フンボルトの最初の自画像(図11)とアンシャンレジームの地理学者であるフェルメールのそれを比べてみると、二つの像の間には構造的な対立が気づかれるだろう。まずその雰囲気に関してである。なぜなら、地理学者が仕事部屋ではなくて、神秘的な自然のなかにいるのをはじめて見るのであり、とりわけそれまで地理学者の肖像に結びつけられていた地理的地図の存在が目立たないからである。この自画像のなかでフンボルト(1769-1859)は、自然の諸要素を持ちながら書物を手にし、その足下には気圧計を置いているが、地図をもっていない。なぜなら地図はいわば捨てられているからである。それが赤道地域へのフンボルトの旅行全体を想起させる雰囲気であり、同時にその旅行は「投影された」自然という洞窟の神話へとわずかに回帰している。フンボルトの手元にある書物は植物図鑑であるが、それは書物自体が強く勧めるような言説、論理を意味しているのである。

フンボルトの二番目の(晩期)自画像のなかでみることができる地理学者の唯一の道具は、クレヨンと紙というエクリチュールの道具である(図13)。フンボルトの背後にはその肩越しにキトのそばにあるチンボラソ火山が(原画上で)認められるが、それは「プラトン主義」学派を暗示している。この学派によれば、大地はそれ自体によって形成される。反対に「水成論者」たちは、神が大地と水を切り離したと語る聖書から出発した。ブルジョワ学者たちは、貴族 封建時代、すなわち数と奇蹟(「古い真理」)の時代の後に、火山をうまく説明できない口ゴスを再び導入する。フンボルトはこの火山が地球で最も高い山であることを明らかにした。なぜならその時でさえカナリア諸島のテネリフの頂きが最も高かったと信じられていたからである。

カール・リッター(1779-1858)もまた手にクレオンを差し出している(図12)。地理学という批判的地理学のもうひとりの偉大な代表者は、地理学という表題で18巻を出版した。その最初の巻は1817年に出版され、最終巻は彼の死とフンボルトの死の年と同じであった。それはまたダーウインの『種の起源』(1859)の発売された年でもあった。

リッターにとってこの当時まで、地理学は行われておらず、特に鉛直性を犠牲にして面積測定や距離測定

が行われていた。きっかけは、大地に属する諸原理を用いて、大地によって大地を記述することから生じる。古めかしい記述が(先駆的な)「現象学的」実践に置き換えられねばならない。したがってリッターはその地理学のみならず、縦方向(経度)の次元を鉛直的次元に対立させる。諸関係の作用としての大地の解釈に適用されるべきは前者の次元となろう。つまり以下の三つの次元間の関係に従って、観察、記述される地表の諸地域。

水平性
深層
高さ

しかしながらリッター以後この時代まで、真の地理学は存在しなかった。なぜなら闘争の賭金であり、唯一権力の関心を惹いた平野の記述に限定されていたからである。地理学は新しい問題意識を獲得することで18世紀の地理学である「純粹地理学」の延長として与えられる。しかしながら地理学の地理学者たちとは誰のことだったのか。

フンボルトと彼の出自に戻ると、彼の父はプロイセンのフリードリヒ2世の宮廷侍従であった。フンボルト自身は王城で生まれ、兄ウィルヘルムはプロイセン王の大臣であり、またベルリン大学の創始者で、かつ近代言語学の父のひとりであった。フンボルトはこの近親に連なるが、彼はまた真の革命家でもあった。熱狂的なジャコバン派であったゲオルグ・フォルスター(偉大な博物学者、ヨハン・ラインホルト・フォルスターの息子)とともにパリに行き、フォルスターがドイツにもたらすことを望んだフランス共和国革命を強力に支持する。パリへの旅行後、アレクサンダーは宮廷での仕事から縁を切ることになる。彼は自らの名前から小辞をはずし、母の死後その遺産のすべては、大探検、個人による最初の科学的な探検に出資されることになる。

この時代にドイツ人には到達不能な最初の目標であった、インドやアフリカに行く可能性はなかった。なぜなら彼らの船は出発する前に失敗したからである。フンボルトは、植物学者であったエメ・ボンプランとともに、最終的に中央アメリカへ向かうが、そこはブルジョワ文化によって伝えられた想像上の国、熱帯の神話と合致する。フンボルトは実際に、フランスの経験をドイツ文化に翻訳することで、フォルスターの戦

略を逆転し、革命を為そうとした。このために審美的・文学的な自然、左派の歴史家であるフランツ・メーリング Mehring が語った「審美的な見かけの王国」に由来するブルジョワジーの言語を採用しなければならない。したがってそれが、景観という用語の科学的な使用を発明する文化戦略となる。景観という用語は、文学的で絵画的な意味(プサン Pousin など)を持つが、科学的な意味はもっていなかった。確かにブルジョワ的な想像の世界のなかに、とりわけ熱帯世界に関する文学的伝統が存在していた。だがここで景観は、フンボルトの仕事によって科学的概念となり、地理学全体が景観の地理学となるであろう。

景観が物と物のイメージを同時に意味する希有な用語のひとつであること、そしてフンボルトが貴族・封建的地理学の袋小路から脱出するため、この両義性につけ込もうとしていることに注意しよう。フンボルトは、物と別の物との対立を逃れて、物のイメージに依拠しつつある。景観 Landschaft。フンボルトはイメージに二重の特徴を生じさせる。ひとは「大地」を見ていると信じて、景観を見ているのである。地理学は、このようにして客体/イメージ、現実/地図という二元性からやっとの思いで逃れるのである。リッターの第一の標的は、フンボルトにとってと同様に、準拠と解釈のモデルとしての地図の独裁的な要求である。

この企図について、地理学史家たちはなにも語らないかあるいは歪曲している。リチャード・ハートションは『地理学の本質』(1939)¹⁸⁾のなかでアングロサクソン地理学の歴史意識を示している。ハートションはリッター「あるいは科学としての地理学」を論じているが、観察から観察へと進む演繹の手続きの科学として地理学を扱っている。さらにハートションは部分的に引用を行うが、それは上で引用されたテキストのなかに、意味の全体を変えてしまう根本的な二つの方向があるからである。すなわち「あらゆる科学の問題は、リッターが書いたように、アプリアリなもの、つまり理想上の調整点の予備的な定義のなかに位置づけられる。」この理想的な点は理論や仮説を意味するが、「世界観 Weltanschauung」というこのアプリアリなもの、定義がない科学は存在しない。この世界観は、唯一の真理ではなく、その固有の科学的手続きを生み出す以前は、人間たちのなかのひとりである主体にとって妥当するすべての真理内容である、という

事実に強調が置かれることになる。言い換えると、真理とは科学にあるのではなく、自然および他の個々人との諸関係のなかにいる主体の体験に対応するのである。そこで世界観と「科学」の媒介としての認識という問題を提起するのが、地理学の力学である。科学というものは、別の面で非科学的な世界観の確認に他ならないが、この世界観がなければ科学を語ることはできない。

さらにリッターにとって常に、人間性の教育の場、人間の家でないとしたら、大地とは何であろうか？ **すべての景観はエクリチュールであり**、ひとつの「象形文字」である。**なぜなら、その形態はまもって人間性の全未来を含んでいるからである**。神の摂理は、救済の(大文字の)歴史を築くのになぞらわしい見方で大地を作り上げた。故にそれは、世界の合目的性に基礎づけられた目的論的な見方であり、大地それ自体をその固有の世界観から引き離すためである。確かにフンボルトは無神論者であり、リッターの敬虔主義のプチブルジョワジーのロマン主義を共有していない。しかしながら共和制のイデオログとして、フンボルトは根本的に同一のことを考えている。二人の地理学者は、(彼らの目には)政治権力に対して直接的に機能する地理学である「古い科学」に対して、世界の科学的イメージを打ち立てようと試みる。なぜならアンシャンレジームの地理学は、あらゆる科学を無視する一方で、この地理学が提案するのは「有用なこと」であり、有効かつ実用的であるからだ。

地理学はブルジョワ科学を生み出す。だが言説が、固有の規則を自らに付与し、それ自身によって正統化されるのではなく、反対にその政治的有用性の観点から正統化されるとしたら、科学とは何だろうか？それは「自己正統化する」自己準拠的で自律的な知である。「私はある場所の気温と標高の二変数を測定する。そこで私はひとつの関係を疑い、測定の前すでに現実的なものの観念をもっていた。」とフンボルトは指摘している。つまり科学はイデオロギーの確認にすぎない。地理学という企図は巧妙である。なぜならその企図は決して語られてこなかったからである。それは決して固定化されることなく、真理へと向かう個別的な世界の科学認識であり、地図学と知、つまり「真理」のいかなる結晶化も拒絶する。反対にイデオロギーと自己準拠を結びつける関係は実証主義の標的になるで

あろう。

以上のことの例示として、フンボルトの最も重要な仕事である『コスモス』(1845, 1847, 1850, 1858)に出版された4巻)を取り上げよう。コスモスとは「世界 monde」(ピュタゴラスを参照)を意味するのではなく、装飾的 cosmétique (装い)と同一の語源から、秩序としての世界を意味している。1848年(ドイツ革命の間)に出版された第2巻で、フンボルトは、世界を構想した過去の諸文化を通して、「世界観の歴史」と彼の解釈を提示すると同時に、彼固有の認識論を構築している。

フンボルトは人間の諸文明の中で、個別的かつ集団的な認識の三段階を区分する。

印象 (EINDRUCK)(impression)の段階; 対象: **全体性 totalité**

理解 (EINSICHT)(examen analytique)の段階: **区分 découpage**

関係性 (ZUSAMMENHANG)(les systèmes)の段階: **全体像 vision d'ensemble**

第一段階はアプリオリなもの、最初の情緒的印象を含んでおり、自然美に対して持つような印象である。第二段階は荒削りな経験(印象に限定された「旧科学」の「教養人 Gebildeten」の経験)を修正し、カント的な意味での分析に関連する。第一段階のなかに、第三段階で再発見され表現される全体性の契機が存在する。換言すると、第三段階は、非科学的な理論あるいは観念の科学的な翻訳であり、それは自律的な知としての地理学という意味である。

歴史 社会的観点から、この行程は認識における主体の現出に等しい。フンボルトの目的は、ブルジョワジーの荒削りな経験を修正することであり、そこではストラボン(リッターの地理学者)以後の科学的地理学のルネサンスが問題となる。この地理学において個人は、すべての大陸に到来する新しい市場と同様に、公共的かつ私的な新しい権利の指示対象として位置づけられる。

しかしながらフンボルトは1848年に、「私からすれば、人は始めなければならぬ場所で立ち止まってしまう、止めてしまうのである。」と悲しげに書いている。それは前世紀前半、世界の全循環を変えてしまうパナ

マ運河の工事の時期であり、資本主義の時代を迎えて、すべての大地の表面を前もってデッサンしつつあった固定資本への大規模な投資の時代の幕開けであった。パナマ運河は、商品流通の迅速な達成を可能にする地表の修正である。それは最も大胆な人間の介入であるが、正反対に 科学の時代あるいは応用科学の時代ではなかった。フンボルトの文章の意味は、科学的言説と政治的実践の間に矛盾があるという事実に基づく。つまりフンボルトは地峡を研究すること(将来の図面の最低点を標定するための水準測量)を、それが現実化される以前から始めていた。しかしながら運河に関わるいかなる会社もこの動機に従わなかった。あらかじめおこなわれるべきこうした作業の必要性が理解されたのは、かなりのちで、数十年後のことである。フンボルトの悲しみはブルジョワ科学の企図の挫折を意味している。すなわち新しい権力形態のための知としての科学。それは知の論理が、権力の論理、権力を知に服従させる合理性の論理に対応していない証明である。権力の論理は知の論理とは逆にさえる。

批判的科学が消滅するのは1849年である。1848年は革命の年であり、ドイツ帝国形成の前夜であった。1849年は反動の年であり、1850年、それはかつての貴族と新しいブルジョワジーの間の政治的契約の年である。動物園のあるプロイセン城を訪れると、門の後ろで腰掛けている小さな老人に気づく。学者フンボルト、(大文字の)知の古びた台座。政治的なものの自律性の表明。それはまた批判的地理学の終焉である。ひとたびブルジョワジーが権力を持つと、地理学はもはや批判的知を必要としない。そしてブルジョワ革命はそこで終焉する。

リッターとフンボルト以後、停滞の時代が続くが、もう一人の地理学者が地理学の企図を数年後に再興することになる。それは、19世紀後半の最も偉大な地理学者フリードリッヒ・ラッツェルである。

18. 地理学の終焉: フリードリッヒ・ラッツェル

フリードリッヒ・ラッツェル(1844-1904)の悲劇を理解する必要があるが、それについては余り知られていない。なぜなら地理学史料の編纂が非常に乏しいからである。我々はラッツェルという人物についての

説明をもっているが、それは驚くべき曲解である。ラツツェルはほとんど常に地政学の先駆者として、あるいは人生の最後になって神秘主義の危機を認識したが、もはやより多くのことを全く理解しないで終わった地理学者のひとりとして描かれる(最悪の紹介)。そうではなくてラツツェル(彼の生涯と作品)は、**地理学の有効性の証明であり**、しかしながら同時に批判的な知を再生産することの不可能性の証明でもある。なぜならもはやブルジョワ社会が国家と合致しつつあったからである。反対にベルリン革命の時代までは社会は国家と対立していた。つまり社会が貴族 封建的国家に對立していたので、地理学は存在した。

ラツツェルによって、地理的知が地理学という学問へと移行する道が開かれたことがわかる。地理学について語る時、つまりこの地理的知識の全体性について語る時に、ラツツェルは地理的知識の全体性を断片化した最初の人物である。この地理的知識の内部で、さまざまな地理学は区別されない。ラツツェルは実証主義者であり、コントを研究していた。ラツツェルにおいて、「人類 地理学 Antropo-geographie」(それは人文地理学ではない)と政治地理学の間に区別が生じる。ラツツェル以前には地理学だけが存在しており、地理学以前にはいわゆる地理学だけが存在していた。

したがって人類地理学と政治地理学の間にどのような関連があるのだろうか? ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュによると、ラツツェルの政治地理学は人類 地理学(ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュにとっての人文地理学)の特殊形態になるだろう。しかしながら『人類地理学』(1891)の第二巻の序文を読むと、ラツツェルはそこで、人類地理学が、政治地理学すなわち科学的観点から政治を構築するための道具である地理的知識を構成するための前提にほかならないと言っている。したがって政治地理学は人文地理学の特殊形態であるとするヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの解釈は逆転されなければならない。**政治地理学の(予備的な)特殊形態なのが人文地理学である**。ラツツェルのなかには、政治目的のない地理的知は存在しないという意識があった。そしてそれが地理学の認識であり、貴族 封建的地理学の実践であった。ラツツェルはまた地理的知の全体性を破壊したが、地理的知の諸断片をそれぞれバラバラのままに読解することはできないと語る親切さも持ち合わせている。つまりこの断片の間に階層性、

つまり政治的なものに立脚した階層性さえ確立されることになる。

したがってラツツェルが自らの立場をはっきりと示していたにもかかわらず、なぜはヴィダル・ド・ラ・ブラーシュはラツツェルの立場を逆転したのであるか? ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュにとって、政治地理学は必要でなかった。なぜなら人文地理学について語られる時に、社会のなかで生きる人間に常に関わるからである。したがって政治地理学は単に人文地理学に他ならない。**ヴィダルは地理的知の意味(その政治目的)を、社会における人間という対象に置き換えた**。我々は批判的地理学から人文地理学への移行の直前にいる。我々の地理学、それは(誤った)実証主義、知識の対象に由来する。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは地理学の最後の代表者を誤解している。しかしながらそれはヴィダル・ド・ラ・ブラーシュにとどまらない。ドイツにおいても実証主義地理学の隠蔽という同一の現象がある。地理学から離脱しつつあったラツツェルの最初の同時代者は、地形学者のオスカー・ベシエルになるであろう。彼は1876年に『新しい比較地誌学』という論文を書いた。その主張はリッター(ラツツェルの先生)の古い地理学に對立するものであり、大地の形態の研究に関するリッターの非科学的態度を非難する。ベシエルによると、リッターは大地の形態を概念的に研究しようとしていたので、大地の形態の正確な写しである地図の研究に依拠していなかった。ベシエルにとって、大地の科学的表象の手段、それは地域のタブローである地図であった。ベシエルは非科学的であるとして、リッターの(不精確な)方法全体に異議を申し立てている。ベシエルにとって、地理的相同性とは地図上で確立されるものであり、それは地図によって証明される。相同性はアナロジーではない。相同性とは、機能的な類似性を適用し、物の構造と生成を証明することである。そして地理学の歴史においてはじめて、地図の無言の決定が科学的なものとして議論の余地のない価値を引き受けることになる。

ラツツェルの死の2年前の1906年に、ドイツの優れた地理学者、オット・シュリユーターが『人文地理学の目的』というテキストを書いた。シュリユーターによると、地理学において科学的方法、真の科学的方法、つまり地形学の研究と同一の手段によって人文地理学の諸形態を研究することが既に展開されていた。

ラスゼック・コロコウスキーLaszek Kolakowski が『実証主義の哲学』のなかで十分に明らかにしているように、実証主義の原理のひとつは、自然科学の原理を人文諸科学に適用することにある。シュリユーターにとって地理学は、「対象の科学 Gegenstandswissenschaft」、つまり（文字通り）**対象（客体）の科学**である。シュリユーターにとって、二種類の科学が存在した。つまり生成の科学あるいは「歴史科学」（歴史）と具体的な対象の科学である。オットー・シュリユーターにとって、地理学では具体的な対象（客体）だけが認識されることになる。

ラッツェルは決してこうした主張を受け入れていなかった。彼がベシエルの追悼文を書いたときに、地図学の発展を認めているが、地理学における客観性の基盤としては地図学を受け入れられないと主張する。なぜなら地理という科学の目的は決して地図ではないからである。ラッツェルは地図を利用するが、**地図を疑わねばならないこと**をはっきりさせることでそうするのである。例えば、海岸図は線を描くが、ラッツェルにとってこの線は実際にはひとつの帯として考えられねばならなかった。我々は地図を信用してはいけない！ また 1899 年のベルリンでの第 7 回国際地理学会議で、ラッツェルは地理的位置 Die Lage の概念を提示することによって、ある島（あるいは国）の位置を確定するためには地図を止揚すべきであるといった。なぜなら位置とはひとつの関係だからである。関係を定義できる地図は存在しない。関係は常に精神、つまり我々の頭の事実である。

現実の客観的な表象としての地図に立ち戻ることは、理論の放棄を意味する。そして立ち戻るとは、地理学のブルジョワ以前の状況と地理学の革命以後の状況の間の諸条件が等しいことを意味している。貴族 - 封建的地理学の内部における地図の最初の機能はなんだろうか？ **言説を閉じこめ、言語活動（ランゲージ）を閉ざしてしまうことである。**地図とは物がある場所である。そして現実、それは地図上にあることのすべてである。地理学の応答はどのようなものであったのだろうか？ **リッターにとって、大地の諸形態は象形文字であり、この記号を理解するために我々は死話 parole、言葉を利用しなければならない。**リッターにおいて大地は、理解することが問題となる真の言語そのものである。しかしながら言語は権力の発現ではなく神の顕

現であり、神が言語のみならず大地と歴史の創造者である。先験的に科学的かつ哲学的なリッターの計画が挫折するとしても、リッターの背後には、大地それ自体の現象学的観点から大地を分析しなければならないというこの経験が残っている。ペーコンが書いているように、真理とは混乱よりもむしろ誤りから生じる。

地理学の戦略は、権力の生産から言語を保護することにあった。言語は物それ自体であり、リッターの思想において、大地は目的論的な概念に対応している。ブルジョワ地理学は、貴族 - 封建的地理学の似非科学としてのイデオロギー的本質を明らかにすることで、この地理学を破壊しなければならなかった。したがって地理学とは、すべての科学のイデオロギー的特徴をア priori に認めることによって、そうした特徴を克服する試みである。リッターとフンボルトは、地理学をひとつの科学としてではなく、科学の《試み》として考えている。その努力は、その根がイデオロギー的である知識の科学化にある。こうした試みは、地理学知の内部に緊張がなくなりつつあった 3 月革命以後、世紀後半のドイツ地理学によって封じ込められつつあった。**まさに主体と客体との緊張である。つまり地理学において、主体と客体は相互に協同で構成されるのであり、さらに地理学にとって客体は主体の反映となった。**

上でみてきた著者たちの実証主義的地理学とともに 19 世紀末から、すべてのことが封じ込められた。なぜなら、客体は主体の反映ではないからである。つまり客体、それは地図の産物であり、客体はその固有の客観性によって主体に自らの価値を認めさせる。真の喪失が地理学者の仕事のなかに生じた。

ラッツェルの最晩年に『自然の解釈について Uber Natureschilderung』という最後の作品が出版されている。それは真の科学的な試みである。確かに情緒的で神秘主義的なところもある。しかしながらこの作品のなかで、景観の知識が地理学的知の頂点になっている。ここにいまだにひとつの逆転がある。なぜならフンボルトにとって景観は地理的知の出発点だからである。晩年のラッツェルによって、科学的知の過程は美的問題によって終わることになる。ラッツェルの悲劇は、**地理学的知のなかに真の知の理論を再導入するという 絶望的な 最後の試み**にある。景観学が地理的知の頂点に位置づけられる。地理学が明らかにしてい

るように、認識論は主体と客体間の関係、つまり主体による客体の構成が分析されるときに提起される問題である。しかしもし客体が既に固定されているとしたら、そこでは地理的知の理論は持つことはできない。認識 Er-kenntnis あるいは審美的な印象の概念的な契機への転換はもはや存在せず、知ること Kenntnis だけが存在する。科学的知は定義上、美的な問いになりつつある。ラッツェルの晩年における神秘主義は、地理学において哲学的な緊張を維持するための絶望的な試みである。ラッツェルはゲーテの(まばゆい幻想を放つ)観念論的な形態学をいまだに信じていた唯一の人物である。そこにラッツェルの非合理的ではない神秘主義、認識論的緊張があるのがわかるだろう。フンボルトの企図に勝利を与えるのは美学である。地理学の継承者であり、主体の地理学者であるラッツェルは国家との関係を絶つことになる。国家は地理学の過程を封じ込めて、社会を占領した。フンボルトの沈黙あるいはあらゆる批判の不可能性、ベルリン革命の直後にわめき立てた少数の労働者に応答することの不可能性が、国家に抗する社会の圧力の終焉と戻ることのできない転換点を示している。ブルジョワジーが権力を奪取した時から、地理学は何の役にも立たない。消滅しつつある絶望の人ラッツェルに叙情を駆り立てるのが、こうしたすべてである。国家に抗する社会が存在しなければ、もはや社会は存在しない。

ライプツヒヒ大学教授、男爵フェルディナンド・フォン・リヒトフォーフェンは、『今日の地理学の課題と方法(1883)』という題目で就任講演をしている。彼は、ある物の復原は物それ自体と置き換えられないので、岩壁の彫刻の写真が考古学者に役立つ以上に、地図は地理学者にとって役立つに違いないと主張する。このことは地図が物の写真とは別のものであることを意味している。認識論的観点から、地図は物の表象以上であり、物そのものであり、同時に本質であり表象である。地図、それは物である。すなわちそれは再生産の場所であると同時に、再生産される物の本質が証明される場所でもある。

ひとつの物象化の歴史、つまり人間に抗して打ち立てられる歴史的社会的生産と疎外の歴史であり、それはおそらく我々の近代性の主題のひとつである。地政学はラッツェルの挫折から生まれた。フランスで闘い、ヴェルサイユで皇帝としてのプロイセン王の戴冠

式を目撃したラッツェル。だがラッツェルは愛国者であり、リヴィングストンと同様に熱心な官吏であった。彼の成功は他の場所、つまりその理論と概念の中にある。なぜなら新しい地理学のためにそれを要求したデヴィッド・ハーヴェイが語っていること、つまり「相関空間 espace relationnel」は、既にラッツェルのなかにあるからである。

19. 「空間を客体に、大地を原料に還元する人々」: 実証主義地理学

我々は、この点で確かに地理学思想の再構築の途上にいる。つまりラッツェルは地理学の最後の代表者である。だが我々はカール・リッターが地図学の地理学に対する独裁、現実の地理学的表象と地図学的イメージの間の一致について考えていたことへ再び戻ることになる。その一致は、貴族封建的地理学の庇護の下で、18世紀の地理学にとって規則であった。そして今日、地理学にその科学的な本質を保証することになる一致である。

市民地理学 *géographie civile* とは、ロゴスに対する(地図学的)デッサンの独裁を断ち切る試みに他ならなかった。しかしながらこの試みが、まさにブルジョワジーが権力へ到達した時に失敗したことを我々はみてきた。それがフンボルトの危機であり、ベルリン革命後の危機である。それは19世紀後半の危機である。

我々はまた、革命が(帝国の樹立を目指す)機能的な知へ向けて、出発点に戻るのをみた。フンボルトとカール・リッターによると、「諸現象の現れの下に隠されている現実を把握すること」(フンボルト)が重要となる。それが地理学全体の目標であり、現象(現れ)と物の意味(その究極的な性質、その隠された本質)の間にあるずれの意識であった。反対に実証主義地理学によると、現れが「現実」になる。実証主義地理学は、知それ自体の内部における認識の問題の記憶喪失の上に基礎づけられることになる。それは地図学の独裁への回帰であり、イデオロギー(その固有のアイデンティティの背後に隠されている知)への回帰である。こうした逆転に応じて、もはや地理学的知の内部に認識の問題は存在しない。何も隠されておらず、現実になるのは現れである。地理学的な一般化、つまり地理

学的な類型化の誕生という主題に取り組むことで、そのことは文字通り明らかにされる。類型とはなにか？それはひとつのモデルである。「**理念型**」とはマックス・ウェーバーにとって、存在する物ではなく、存在する物の理解を可能にするものである。それは抽象（化）であって、それがなければ我々は物の多様性を理解できない。それはまた単純化でもあり、ラフェスタンが言うように現実の戯画である。**典型的知識はイデオロギー的知であって、それ自体のアイデンティティ、本質、機能を隠すことになる。**実証主義地理学を理解するために、つまり実証主義的な特徴をもった地理学的知識のイデオロギー的価値を理解するためには、居住様式の類型学の誕生を確認すれば十分である。

我々はドイツから始めて、フランスで終ることになる。ドラーヴェン Drawehn のヴィッツゼッツェ Witzeetze 村（図 15）のイメージを取り上げよう。それは前世紀末にベルリンで出版されたマイツェンの仕事から取られている。

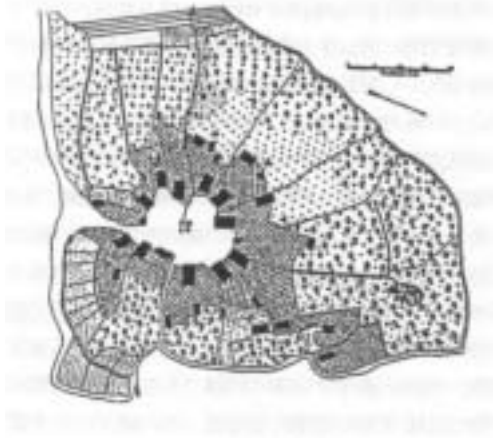


図 15 ドラーヴェンのヴィッツゼッツェ村
（引用：A.マイツェン，西ゲルマン，東ゲルマン…の
集落と農業制度，ベルリン，1895）

マイツェンは歴史家であったが、なによりもプロイセンの官吏であった。彼はプロイセン領土内の農業改革という大事業を指導する責任を負わされていた。この仕事を達成するために、マイツェンはプロイセンの共同体のすべての地籍図を、体系という偉大な精神によって分割する。我々が目の当たりにしているのは、まさにドラーヴェンにおけるヴィッツゼッツェ村の地籍図である。地籍図は村の土地全体の利用価値や性質を明らかにしなければならなかった。そこには森林、沼沢地、樹木、砂、庭、水、小道がある。また非常に長く伸びている耕地形態は細長い紐帯に分割できる。さらに地籍図のなかにかくつかの性質、つまり経済学的用語で、**空間の使用価値とその特異性 singularité**がある。

二番目のイメージは、第一のイメージの再生産でありかつ単純化である。このイメージは、ドイツにおいて地理学の伝統を実証主義地理学へと還元した前世紀の地理学者オット・シュリューターの仕事から借用されている。シュリューターによって行われた「**類型化**」は、領域の種別性を無視し、住居と、道路網でつながれた建物が建てられていない空間の二元性を頑なに守る。さらに地名が引用されていない。なぜならシュリューターは、地理学者は対象（客体）を記述するだけであると宣言するからである。したがって地理学は物の生成の科学ではなく、**対象（客体）の科学**である。

マイツェンは一般化あるいは「**類型化**」という問題を提起しなかった。彼はある村落のイメージを提供した。反対にシュリューターの心を捉えていた諸問題は、**類型学的秩序の問題、つまり個別的なものから一般的なものへ、個から属へと移行すること**であった。注意して観察しなければならないのはこのメカニズムである。

この移行のなかで情報に関して失われることになるものの問題を提起することから始めよう。あらゆる性質、つまり質的コノテーションの場と場所において、住居と無色の部分のほぼ二項対立がある。それは耕地を定義する道や小道によって強調される対立である。もはや森、砂、沖積土、沼沢地などはない。住居の数と形態および道の形態だけがある。残りはすべて無色である。無色の部分は、地図学的な単純化でも変わらない黒色の資料を強調するだけである。これは根本的な変動である。この単純化によって、我々は名前をも

った個別の村をもはや持たず、「円村 Runddorf」というひとつの型を持つことになる。一般化が確立されるのは、こうした単純化によってである。我々は個から型へと移動する。この移動を行うためには、性質、つまり空間の使用価値が犠牲にされねばならない。

地図の媒介：我々は、あらゆる質的情報の喪失という犠牲を払って行われる類型学を問題としている。それは地籍図のイメージから村落の地理学的概念への移行である。地理学辞典を開くと、そこにはまさにこうした「類型化」がある。もはや対象の形態だけがあり、その機能や性質についてはなにもない。この地図の媒介は景観の骨格の復原を目指している。ここで「軍事的」という形容詞が付け加えられねばならない。国民国家の地図学的イメージは軍人たちによって作り上げられたイメージである。地図とは戦争をするために不可欠な現実的なもののモデルである。地図的なイメージが機能するための基準、原理を理解したいならば、フォン・クラウセヴィッツの『戦争について』¹⁹⁾を読まねばならない。

フォン・クラウセヴィッツはリッターの弟子であり、プロイセンの軍事アカデミーの出身である。軍人にとって、領域ではなく、土地/戦場つまり地面の性質と形態が存在する。領土が政治管理の機能によって独自性を与えられた空間であるのに対して、それは物理的・形態的定義である。フォン・クラウセヴィッツは基準が障害物という基準にあることを付け加えている。換言すると、軍人たちは戦争を遂行する際に、一連の障害物として地表面を観察する。彼らはあらゆる障害物を地図上に描き、残りのものを忘却する。住居は描かれる。なぜなら住居は軍事活動を組織する場合に問題となるからである。戦場を移動する際の敏捷さを妨げない二次的な障害物は考慮されないのである。

軍人にはこうして地図を作成する十分な理由がある。問題は、国民国家が軍人によって作り上げられたイメージを自ら進んで生み出すことにある。確かにこのイメージは非常に特殊な目的に対応しているが、このイメージは地理学者がその固有の客観性の基礎を置く場所となっている。

マイツェンが形態（集落形態）に関心を寄せたのに対して、型（集落型）によって同等のものを確立したのがシュリユーターである。19世紀前半の地理学の間からすると副次的なものであった型、形態、障害物へ

の還元が最も重要になる。明らかに複数の理由と要求があった。領土上への固定資本の最初の大規模な投資を企てることが重要であった。例えば鉄道である。軍事地図の市民への自由な販売に関して、プロイセン全体で大論争が生じることになる。軍事的なイメージの上に近代国家の構築が基礎づけられつつあった。なぜなら、鉄道路線、道路、大規模なインフラストラクチャーを描くために地図の直接的な必要性に直面していたからである。しかしながら地理学の悲劇は、こうしたイメージが必然的に現実の客観的なイメージ、単に現実になってしまうことにある。地理学者たちはこのイメージを信じることで始める。なぜならば地理学のように、理論、すなわち言説を規定する理念的な統制点についての問題を提起した批判的地理学は、もはや必要とされなかったからである。それは地図上でのイメージという特殊な形態の下で地図学の独裁へ戻ることである。

おそらくフランス地理学史の最も繊細かつ地味な解釈者であるエミール・ブルジョワ Emile Bourgeois は、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学が記憶の忘却と同時に地図を見るための「差し迫った招待」として誕生したと語っていた。フランス古典地理学と人文地理学の創始者であるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは、1:50000²⁰⁾のフランスの地図が発売された時（それはラツェルの死の年（1904）であった）に、次のように書いている。「地図は地理学においてすべての誤った概念を修正するようになる科学的道具である」。そしてまさにその『人文地理学』²¹⁾のなかでジャン・ブリュンヌは、村落とは住居の集合と形態にほかならないと語っている。フランス地理学全体の考察を行うと、この方向性が続くことになるだろう。1960年代初頭に重要な作品である『大地の上の人間』を出版したマクシミリアン・ソールにとってのみ、村落は歴史的社会的観点から決定されるひとつの現実であった。しかしながらソールは、地理学は地図学と提携するならば、その真理を発見すると語っている。「定住すること Siedlung」が「住居」になる。過程が対象、物になる。

リュシアン・フェーヴルは我々に、この移行の本当の意味を理解させてくれる。1922年に出版された小さな書物、『大地と人類の進化』²²⁾の中で、フェーヴルはドイツ地理学に関して非常に不毛な論争をしている。それは決定論と可能論の論争であるが、実際には誤っ

た論争であり、間違った対立である。決定論とは自然環境の人間に対する支配となるだろう。環境が人間の組織の諸形態を決定し、この形態によって人間はお互いに結びつけられる。ドイツの「決定論的」地理学は、「不適当」と考えられ、(歴史家であった)フェーヴルによって、フランス地理学は可能論を発明する。つまり可能性の理論である。フェーヴルは自然環境の役割を道路標識と対比する。すなわち自然環境は可能性の幅を与える表示にすぎず、その文化と価値に応じて最終審級で決定を下し、選択を行うのは常に他の人間たちと結びつけられた人間である。可能論 決定論という二分法あるいは二極化は、人文地理学の解釈の最も強力なモデルであったし、今日でもなおそうである。しかしながら、それは誤った対立であり、地理学において決して存在しなかった対立である。**そして現在の地理学思想における地図学的イデオロギーの隠された影響を我々に示してくれる対立である。**

議論の空しさを明らかにするために、次のようなシナリオを考察してみよう。ニューヨークは、人間と環境の間の関係のまさに事例となる場所を占めている。この場所ははじめから、土着の狩猟採集者たちによって人間の手が増えられている。次にオランダ人たちがそこを占領し、港を建設するためにこの場所を全く変えてしまった。最後にイギリス人がマンハッタン島を獲得し、経済上の首都を建設する。このシナリオは決定論者ではなく「可能論者」の本質である。ところがこれは、F.ラッツェルによって事例として挙げられたものであった!

現象学の哲学者、フッサールは、ヨーロッパ諸科学の危機とガリレオからベーコンへと至る諸科学の破綻という文脈において衝撃的なことを語っており、我々はそれを地図学に関して利用できる。ガリレオ物理学の空間 時間の理念化は、幾何学に根拠を置いている。現実の地理学的イメージを確立すること、それはその要素間に因果関係を仮定し、構築することである。つまり現実の幾何学的描写はすべて、この描写の諸要素に因果的な機械論的關係を仮定している。**すべての地図は世界の一部分を描写するが、この世界の内部において対象は幾何学的論理によって潜在的に結びつけられている。**したがって地理学における決定論の誕生の場所は、地図によって仮定された機械論的關係のなかに位置づけられる。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは、

地理学の手続きは記述し、定義し、分類し、最後に演繹することであると宣言する。実際には、地図を生み出す原因は決定論にある。地図を描き、次に定義し、分類し(類型学)、最後に明らかに主観的であるが(誤って)客観的とみなされるなにかを演繹するのである。出発点は記述である。だがドイツにおいては固有の観点を定義することなく記述することはできなかった。事実、地理学は決して記述「から始めなかった」。したがって決定論者なのはヴィダルであり、計量地理学はこの手続きと直接的なつながりを持っている。

20. デッサンの勝利：計量地理学の起源へ

計量地理学全体はただ一つの共通した原理の上に築かれている。我々はこの主張をウィリアム・ブンゲに負っている。ブンゲの重要な作品(1962)は『理論地理学』²³⁾(Gleerup, Lund)である。しかしブンゲは計量地理学の真の代表者ではなく、その著作のなかで計量地理学を理解するために根本的なことを語っていた。この著作のなかでブンゲは、**地図学が数学の下位集合である**と言っている。ヴィダル地理学の場合がそうであったように、地理学者が現実の地図学的イメージを現実の代替物として受け入れるとしたら、数学をさらに受容することになる。事実、地図学はその背後に残余があるので、それは現実の不完全な形式化である。地図に対して、計量的な形式化はより強力な形式化となる大きな利点を持っており、**この形式化のおかげで、現実をより洞察力に富んだ精緻なモデルに配置することが可能となる。**すなわち計量地理学は**ヴィダルのな実証主義地理学の完成にほかならない。**それは依然として、荒削りな形式化のタイプから完成された形式化への移行にすぎない。最も愉快なのは、計量地理学が常に地理学革命として考察されてきたことである。ジャン・パートン(カナダの地理学者)²⁴⁾が、1963年に計量革命について語ることができたのは、この点についてである。計量地理学は、地理学において決して達成されてこなかった最も大きな革命として描き出される。

革命ではなくて、ヴィダル地理学と既に貴族 封建的地理学の原理だったものの完成だけが問題となる。貴族 - 封建的地理学が既にあらゆる現実を、数つまり

数字に還元していたことを思い出そう。計量地理学はさまざまな事実に対するひとつの判断であるが、この判断を支えることを可能にした諸価値に対して、もはやいかなる場所も残していないことになる。数字に訴えることによって、説明の試みが排除される。革命とは反対に、ひとつの保守的態度、歴史的観点からすると反動、貴族・封建的概念への回帰が目撃される。

要するに実証主義地理学の問題とは何であるのか？ シュリユーターは村落の類型学を定義しようとした。シュリユーターが生産しつつあるのは常にロゴスであるが、それは人文地理学の意味、機能という問題をもはや含んでいない。反対にロゴスは、地図学的言語への転位に他ならない諸概念の上に築かれている。我々の最初の事例（村落）において、それは円形性というイメージである（図 16）。

実証主義地理学において我々は地理学的知の意味の問題を喪失している。同様に計量地理学は実証主義地理学の完成にほかならないので、地理学的知の記憶喪失、歴史性の喪失がある。計量地理学はまずなによりも、合理性という形式化の基礎の上に自らを定義し、機能する。形式化とはまずもってあらゆる記憶の不在、歴史性の不在を意味する。記憶と省察のこのような不在が、計量地理学が本当の革命として自らを提示しようとも、それをひとつの連続性、反革命に過ぎないものにするであろう。しかしまさに計量地理学はそのことを知らないし、知ることができない。



図 16 円村

（O.シュリユーター，農村集落の形態（A.マイツェン以後）『地理学雑誌』6，1900，pp.248-262.）

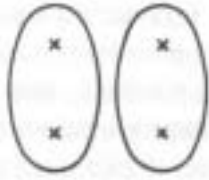
ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの矛盾は、彼が地理学を行わざるを得なかった歴史家であったことにある。つまりフランスが 1871 年にプロイセンとの戦争に破れた時、政府がヴィダル・ド・ラ・ブラーシュを無理矢理に地理学者にしたのである。戦後、プロイセン軍の優越性が単に技術的であったのみならず、空間のよりすぐれた理解のおかげでもあったことが理解されるようになったからである。つまりフランスにおいて地理学が発見されたのである。世界で最初の地理学のポストは、19 世紀初頭にカール・リッターによってベルリンで占められた。61 年という時間を置いて、フランスで地理学のポストが開設されたが、最初はポール・ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュのポストであった。

記述の確実性の諸条件を前もって決定せずに、科学を始めることができるとヴィダルが言う時に、ヴィダルは地理学における記憶の不在の端緒となった。ヴィダルは地理学においてイデオロギーへの扉を開いた。少なくともヴィダルにおいて、例えば歴史的観点から見事な『フランス地理概観』のなかで、認識論と彼の研究実践は区別されねばならない。しかしながらヴィダルは、フランス古典地理学の中心にさえ省察の欠如、つまり記憶の欠如の可能性を導入している。なぜなら『フランス地理概観』は、記述することによって始められるからである…。

エリゼ・ルクリュエはフランスの唯一の例外であろう。ルクリュエはリッターの弟子であり、無政府主義者クロボトキンの同志である。他の人は皆、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュにしたがうのであり、それは類型学から始めることを意味している。それは地図学の世界である。質的なものがないとしたら、真の記憶を持つことができない。記憶がないとしたら、 $2+2+2=4$ になるという事実を想起することができない。

（非常に短縮された）この語り最後のエピソードに手がかりを与えるために、私はヴィトゲンシュタインによって証明され、『数学の基礎』²⁵⁾のなかに移された問題を考察したい。命題の 38 を見てほしい。

38. 図をみれば十分である。



$2 + 2 = 4$ をみれば、確かにそうである。しかし図を見れば十分である。

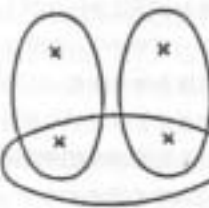


図 17 $2 + 2 = 2 + 2 = 4$

(出典：L. ヴィトゲンシュタイン『数学の基礎』)

上の図で $2 + 2 = 4$ とみえるものが、下の図では $2 + 2 = 2 + 2 = 4$ とみえる。それがヴィトゲンシュタインが確認した問題であるが、彼はその問題を解決しなかった。最初の図では、2つの「集合」が各々2つの単位をもっており、二番目の図ではその上にもうひとつの集合が重ねられているだけである。それはいわば「ピタゴラスの表」を破壊し取り消すためである。その結果は、ピタゴラスの「危機」である。なぜなら観察する目が、2つの単位あるいは加法的に6つの単位の3つの集合を見るときも、全体でそれ自体としての単位は4つにとどまるからである。私は、この講義の終わりで、ヴィトゲンシュタインが『数学の基礎』で提起した「未解決」の問題に答えを与えようとするために、こうしたことが可能であることを示したい。

答えるためには、我々が最後に残してきた点、つまり「計量地理学」の「本質」から、我々の語りを取り戻さねばならない。我々は既に、計量主義者の運動がその存在を主張するような革命が問題なのではないと語ってきた。そうではなくて、いわゆる「計量革命」の原理が、クロード・ラフェスタンが「地図的システム」と呼んでいたことの延長にほかならないという意

味で、回復あるいは保守であることが問題となる。ウィリアム・ブンゲによれば、計量地理学全体がただ一つの原理の上に築かれている。地図は荒削りな形式化であり、「原初的なモデル」である。それに対して「最も科学的な」形式化は、数、数字であって、その地図学的表象は導入あるいは近似として多少は機能する。私が想起した18世紀の封建貴族的地理学の哲学的基盤であったものが、計量地理学の基盤となっている。つまり物を数字に還元すること。したがって説明の不可能性と同時に、現実の還元と、現実を構成している一連の事実の諸関係の還元が問題となる。そしてこの一連の事実、事実それ自体を確立する諸要素のあらゆる痕跡を消失している。

しかしながら、「記述し、定義し、分類し、そして演繹する」というヴィダルの方法論的順序、古い実証主義地理学と比較してひとつの革新、差異が存在していると、私は言いたい。その革新とは何だろうか？それは演繹の場所（位置）である。古い実証主義地理学の中で、演繹は認識過程の最後に位置するとしたら、計量地理学によって我々は最終的には、**演繹の契機が最初の契機である**という意識をもつようになる。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学が、最後の契機つまり到達点として演繹を見ていたのに対して、計量地理学にとって、私が抽象化と一般化、すなわちモデルとパラダイムの利用を意味している演繹は、**地理学的認識の出発点に位置づけられることになる。**

「伝統」地理学と比較して、「計量」地理学の「革命」に関して語ることができるのは、一般化と抽象化の上に作り上げられた認識の契機である演繹の場所のこの逆転においてのみである。そして革命はこの点についてだけである。もともと計量地理学は、いくつかのモデル、抽象物の上で構築されるので、シュリユーターとベシエルの実証主義地理学の場合と同様に、もはや「対象の研究」として自らを定義できず、**地理学の問題を、対象の抽象的な属性の記述の問題、すなわちその分布と空間的關係の問題へと移すことになる。**計量地理学は、対象の記述の前提条件として認められ、認識されるいくつかの原理を提起する。例えば、もはや「河川」ではなく、トポロジーに還元できる「水文学的ネットワーク」がある。もうひとつの事例では、もはや都市ではなく、空間における都市の分布によって決定される六角形のネットワーク（中心地論、クリス

タラーモデル)が存在する。私にとって、計量地理学の妥当性の唯一の契機はそこにある。すなわちデヴィッド・ラッセルの表現を借用すると、地理学的対象の「脱物質化」を達成したことである。

言い換えると、もはや「対象(客体)」が存在せず、対象の脱物質化の必然性があり、したがって物の「隠された構造」(ジャン=ベルナル・ラシーヌによって用いられた表現)を研究することを、計量地理学は認識せざるをえない。例えば、それは異なった街区の社会構成を抽出するための因子分析による都市構造の研究であり、我々はそれを測定するけれども、見ることはできない。

よって問題はもはや、古い地理学と同様に、その物質性を備えた「対象を知る」ことではない。計量地理学は、むしろ抽象化された対象を生産し、物を認識するために対象の物質性を克服するという問題を提起するであろう。したがって計量地理学が、それと意識せずに、伝統地理学の知識がその上に築かれていた現実と現象形態(現実が自らに与える外観)の間の一致を破壊していることに注意しよう。これは途方もないことである。なぜなら我々は、我々が最後に語ったことの後に、**計量地理学の革命の射程**があること、しかし**計量地理学それ自体がそのことについて意識しなかった場所に、計量地理学が位置づけられる**ことを、それは我々に認識させるからである。

そして危機は、意識が思考のもつ影響力を規定したり、統制したりしないという事実の発見によって決定される。これが計量地理学に生じていることである。なぜなら我々が対象の物質性の破壊と同時に、物の現象形態と地図的システムの間の一貫性の破壊を発見するのはここからである。それ故にそれは「現実」つまり世界と地図的システムの同一性の破壊である。地理学を行う時、世界について語らねばならないことを忘れてはならない。大地 Terre に関してではなく、「世界 monde」、すなわち大地の意味作用と価値に関して語らねばならない。

21. Géa の死...

戦後、計量地理学が確立されると同時に、「**景観**」概念の危機がみられる。実を言うと、地理学のなかで国

際的に景観概念をめぐる批判的な試みが為されるのは、60年代初頭を待たねばならない。現在、景観概念とその危機の歴史に言及する地理学の教科書は、当然ながら存在しない。景観に関して、おそらく非常に簡潔ではあるが有効な定式化を見つけるために、大学では教えなかったドイツ地理学者、ワルター・ゲリング Walter Gerling からもう一度、出発しなければならない。ゲリングは、「**地理学は存在論ではない**」と語っている。60年代になお、あらゆる地理学が「**景観学 Landschaftskunde**」、「**景観の知**」、「**景観の地理学**」であったとすることができる。ゲリングは、景観の地理学と存在論の間の一致を破壊した、すなわち**地理学者たちがまだ「景観」と名付けていた地理学的対象の本質の問題**を再び提起した最初の人物である。

我々は既に、景観が地図的システムの理想化として構築されると主張したが、それは概念化の水準における地図的システムを受容の結果であり、世界の現実を地図に還元することである。しかしながら景観概念の機能とは何だろうか？ フンボルトについて語る時に、既にこの問題に言及されていたが、概念の「歴史的に決定された」性質が強調されなかった。景観とは「眺め coup d'oeil」である。人は岬に行き、眺め、物を眺めるのである。しかしながら景観の中でさまざまな物はバラバラの対象として把握されるのであって、その物の間のつながりを確立するのが目になる。**それが景観の「全体性」である。**しかしながらフンボルトの時代にはまだ、景観を眺める目は、物の中に世界の諸関係の痕跡を見ていた。我々は最初の産業革命の時代にいる。その上、景観はある意味で「パノラマ」を意味し、それは都市とは反対に山や高い地点から眺めることであった。なぜなら西洋文化の中で山と平野、都市の不在と都市などの間に対立が存在するからである。それが景観の最初の観念、フンボルトの景観概念であり、地理学における景観の(美的な現象学)概念化の起源である。しかし既にルソーは、**最初の産業革命**の時代を離れていた。あらゆる物が、諸関係の再構築のための指標として利用される。都市があり、都市のそばにぼた山があり、そのそばに工業があり、そして...。同様に、都市のそばに駅があり、この駅には都市と結びつけられた工業へとつながる鉄道が通っている。**相互に密接に関連している対象のシステムがあり、唯一の眺めから機能的情報としてそれを把握することがで**

きる。近接性によって結びつけられた対象の総体は、対象間の関係のシステムを構築することを可能にする。

しかしながら戦間期に地理学全体が景観研究となった時に、歴史家が第二の産業革命と呼ぶものが生み出されていた。そして第二の産業革命は、19世紀の場合のような石炭と重金属工業にもはや基礎を置いていない。それは電力と軽合金工業から構成されている。工業システムを構成していた諸要素の相互に隔たりが生じる。私は水力発電の中心と電気を利用する工業、工場を語りたいが、エネルギー源とエネルギーの変換場所を同時にただひとつの眺めからもはや照らし出すことはできない。私は水力発電、工業、電気を利用する集中した工場を語る事ができる。それならあなたは私に言うだろう。「しかし我々には今日まだ、眺めることができる痕跡、例えば電線がある」と。しかしこの痕跡は、常にますます周辺のなものとなり、空間のなかに発見することが一層困難になる。

今、我々の現実の世界を見てみよう。今日我々はもはや景観をもっていない。現実がそこから構築される諸機能を理解する試みのために、我々はもはや景観に根拠を置くことはできない。なぜなら、生産方法や人々の生きる仕方におけるいかなる革命も、もはや大地の表面の物質性のなかに刻印されないからである。我々は空間の極小化、空間の情報通信化の時代を生きている。もう大地の上に痕跡は観察されない。我々は、大地の機能的現実を読解するためのコードとしての景観の死の時代に居合わせているのである。なぜなら我々が現在見ているものは、世界が機能する仕方と直接的、視覚的には対応しないからである。視覚はもはや何もかも指し示さない...

私の分析は明らかに少々大ざっぱではあるが、景観概念の歴史は大筋でこんなところである。戦後から、景観概念があらゆる科学的機能を奪われていることが確認される。それは科学的道具として作られたコンピューターの発達と結びついた革命である第三（あるいは第四？）の産業革命によってである。実際に景観の危機の契機と計量地理学誕生の契機の間一致がある。それは、計量地理学それ自体の本質を理解するために重要である。なぜなら計量地理学の本質は、地図的システムから「不可視のもの」の水準、つまり「隠れた構造」の水準への転位として構成されるからである。

世界の解釈のコードとしての景観の終焉は、計量地

理学の誕生と一致している。私の命題は以下のようである。説明のための導入的なカテゴリーとしての景観の終焉と「計量的なもの」の誕生は、単純な時間上的一致としてみることはできず、二つの事実の間には直接的関係がある。景観がひとつの理想化であった地図的システムから隠れた水準への転位は、もはや対象を「物」に対応させるのではなく、物の幾何学的モデルに対応させる（都市ではなく、クリスタラーモデルの都市の六角形）。幾何学的モデルの内部に、我々は「物」の抽象化を持つことになる。六角形の内部における点としての都市。

地図学的表象による現実の植民地化の手続きが、この講義の出発点であった。私は、西洋の文化史を、地図学によるロゴスの漸進的植民地化の歴史として読むことができること、我々の「羅針盤」を忘れずにおくこと、を主張してきた。さて計量地理学とはなにか？物を幾何学的性質のモデルに還元するとはなにか？それは、地図学の「エトス ethos」（倫理の派生語であるエトス、現実において行動するやり方）、お望みならば、論理 *logique* を、はっきりとはしないが暗示的な現実の内奥構造に転位することに他ならない。したがってそれは植民地化の「第二段階」であり、地理学的対象の内部での植民地化である。それはクリスタラーの六角形モデルの精神であって、例えば我々に空間の利用を説明する同心円的な一連の円に、都市を還元することである。よって計量地理学が正しいとしたら、それは本当の進歩となるだろう...。全く反対である。それならばどうなのか？認識論的用語で、この計量地理学の根拠について語ることが、非常に難しいことに気づかされる。それは、一般化と演繹の役割の逆転のようないくつかの差異がありながらも、計量地理学が実証地理学の延長であるという単純な理由のためである。したがってそれは「**新実証主義**」であるが、**まずなによりも理論の死**、つまり認識の認識論的水準での正統性の死である。しかしながらこの認識論的沈黙において研究できる。だがしばしば論争という形式の下で、自らを理論化、正当化しようとした何人かの地理学者を不意に見つけることができる。事実、計量地理学は、アングロサクソン世界において、激しい論争を通して確立されたからである。

私が発見できた理論化のより完全な形態は、アメリカで研究していたイギリス人で最も著名な計量地理学

者であるブライアン・ペリーの理論化である。ペリーは『Economic Geography』誌(1960)の論争のなかで、計量地理学は地理学思想における偉大な進歩であると書いている。ペリーは計量地理学によって、事実(地理学の対象)、理論(認識体系のなかで諸事実を体系化するのに利用される)、方法(事実を取り扱うための操作的手段である)の間が区別されると考えている。以前に私は、計量的なものの起源が、抽象化つまり事実の脱・物質化のなかに見られなければならないと注意を促しておいた。それは古い実証主義地理学のような素朴な学問ではなく、反対に帰納によって行われる認識の不可能性を認めている。しかしペリーは事実によって始めている。このことは何を意味しているのだろうか? グレゴリー・ベイトソンは、事実は記述の結果であると説明する。したがってある理論は、「記述の記述」でしかない。ある事実は、誰かがそれを記述する時からのみ存在する。あらゆる言語は記述であるので、言語という「媒介 intermédiation」が存在する。「記述」は、物と我々の知覚装置との間の関係、さらに物のコミュニケーションも意味する。だが事実が記述の結果であるとしたら、事実から出発することはできない。むしろ記述の無数の様相のなかの選択から出発しなければならない。「計量地理学」の沈黙、特徴的なことは、複数の記述の様相間での選択の問題を放棄している点にあるのを、心にとどめておこう。

言い換えれば、手続きを「問題化 problématiser」することなく、計量地理学が行っているように、世界(あるいは大地)を数字あるいは幾何学的ないし数学的モデルへと還元するためには、次の二つのことが仮定されなければならない。第一に世界が秩序づけられていること、第二に世界秩序が必然的に幾何学と数学のなかに自らを映し出すこと、である。

以上のことは、まさに事実からではなく、記述の様相の選択から出発しなければならないことを十分に意味している。ところで計量地理学のなかで誰も問題を提起しなかった。なぜなら常に事実、数字、数から出発していたからである。しかし世界はなぜ秩序づけられなければならないのか? それは新しい問題ではなく、「地理学」、ロゴスの古い問いである。そして我々がみたように、地理学は、世界秩序の理由を示すための試みである。それは、リッターが「観念(理想)上の統制点」と呼んだことである。あなたはそれを、「理論」、

「仮説」、「問題構制」などと呼ぶことができる。しかし計量地理学ではこの観点から、それに関して沈黙しており、さらに悪いことには、この問いを科学を超えた問いと考えることによって拒絶している。

ラッツェルにとっても、世界は秩序づけられていたが、調和によってではなかった。秩序原理は論争であり、弁証法的対決であり、それが世界の秩序である…。計量地理学は、そうしたあらゆる人たちと比べても、我々に何も語らない。計量地理学にとって、それは哲学的問題であるが、ストラボン、そして地理学にとって、それは地理学の問題であった。

22. そして言説の奪回: 新しい論理の探究へ

計量地理学はそれ自身によって危機に陥った。対象(客体)の危機は、同時に主体の危機でもあることを明らかにすることができる。言い換えると、我々は主体と客体の間にひとつの構成的関係を持っている(主体に対する「対象(Gegenstand)」)。

主体
客体

この基本的関係は、記号の定義においてシニフィアン(名)とシニフィエ(物)を区別するために、E. D. ソシュールによって用いられたものと同一の線、仕切りを通っている。意味作用、意味のフィルター。

シニフィアン
シニフィエ

この線が、地図に他ならないことに注意して欲しい。我々が現在まで我々のあらゆるアイデンティティを確立してきた手段である地図。

対象の脱物質化は主体に影響を及ぼし、逆説的に(そうとは望まずに)、脱・物質化は地理学における主体の問題を再燃した。それは最終的に、地理学者たちが「人文主義地理学」と呼ぶことである。しかしそれは単に、地図が現実を理解するためにもはや我々の役に立たないからである。

では人文主義地理学とはなにか? 計量地理学の出

発点をプトレマイオスに置くことが可能である。なぜなら、プトレマイオスはその投影システムによって、表象された現実の外部で不動点にいる主体、観客を固定することになったからである。それが遠近法とプトレマイオスの投影の視点である。人文主義地理学によって、移動の可能性を再発見することになるのは観客である。それは、一方の環境と他方の行動の間に人間を再発見することであり、すなわち歴史、発明、企図、感情を与えられた主体、一言では、価値の担い手の再発見である。それが地理学における「新しい波」、人文主義地理学である。それは、リッターとフンボルトの地理学の主体であった「道徳的人間」、あるいはルソーにおける人間に他ならない。道徳的なものを政治的なものから区別する者は、世界を理解できないと我々に教えたのはルソーである。しかし今日、人文主義地理学と呼ばれるものにおいて、我々はいまだに道徳的なものと政治的なものを区別している。私は、(政治面を代表する)デヴィッド・ハーヴェイの「ラディカル地理学」と人文主義地理学の間、ラディカルではない別の地理学のことを言わんとしている。この別の地理学者とは、今日、理解されてきた世界ではなく、自分自身について、そして世界との関係について反省しつつある地理学者のことである。今、この「アヴァンギャルド地理学」の賭金は何だろうか？ それは、我々が世界との関係を確立する論理体系、言語である。

将来の地理学はどうなるであろうか？既に地理学のみならず、西洋文化全体にとって非常に重要な人物がいる。哲学者であるだけでなく、元々地理学者でもあったカント。カントは18世紀後半に既に、地理学は今日、知として完成しているという「寓話」を書いている。カントは、我々を取り囲む世界の光、明晰さの地理学について「十分に」語っていた。したがって我々の頭脳の黒い空間の地理学が構築されなければならない。カントの「コペルニクス革命」といいうる『純粹理性批判』は、景観の拒絶、「ガイア Gaia」(上記参照)としての大地の表面の拒絶であり、我々の頭のなかにある闇の再発見である。カントの言葉を用いると、問題は、対象と、我々が対象を認識するのに用いる様相との間の関係である。『純粹理性批判』は我々の文明のもっとも重要な哲学的著作である。

皆さん方は結局、根本的には対象の脱 - 物質化が地理学自体の脱物質化と一致しつつあるのをみている。

今、デッサンを占領しつつあるのはロゴスであり、ロゴスがデッサンを破壊することになる(私はそのために研究しているので、この占領と破壊を望んでいる)。

さてヴィトゲンシュタインから引き出した事例に戻って、イメージをみてみよう。なぜ $2+2=4$ になるのか、わかりましたか？ ヴィトゲンシュタインは、我々が提示する対象(まとまっているが、図化されたシンボルによって混乱させられた二つの集合)の上に、「地図の対立物」、つまり二つの集合に重ねられた透明で空虚な第三の集合を置いたのである。この三番目の集合の介在は、ピタゴラスのタブローを無効にする。つまり非 - 同質的なものである。いまやあなた方は、問題を理解するためのあらゆる手段を持っている。この図において、ヴィトゲンシュタインは、論理体系全体を危機に陥れる物を重ね合わせた。彼は、二つのまとまった集合の上に、(主体/客体、シニフィアン/シニフィエの関係の)棒線と同一の物を重ねた。あるいはむしろ棒線の対立物であり、私が理解するものである。

我々は、いわば「二つの集合」をもっているが、それは単に二つの集合ではなく、「二つのシンボル」でもある。それが象徴化するのは何だろうか？ 地図である。その内部に別の記号を包含している図が問題となる。したがって $2+2=4$ である。ヴィトゲンシュタインは二つの地図(地図、それは棒線であることに注意)に、地図の反対物であるものを重ねた。不透過ではなくて、透明でそれ自体では記号の担わない物。それは物質的観点から地図の反対物である。それはピタゴラスのタブローを無効にするのに十分であり、我々が同質性という基準によって、物のなかで物を取り扱うのに慣れている道具である(洋梨と洋梨、林檎と林檎など)。なぜ物のなかで異なった物を取り扱うことができないのか、ポリュフェモスがなぜ全くばかげたやり方でだまされたのかを、誰も私に説明してくれなかった。しかしながら我々はヴィトゲンシュタインが行ったことを理解した。ヴィトゲンシュタインは、地図、つまり記号内容をもった容れ物を取り上げ、次に地図とは正反対の別の物を地図上に重ねた。何も含んでいない反対物、なぜならそれは透明だからである。しかし彼の目が見ているように、 $2+2+2=6$ であると読むことはできない。なぜなら要素は4つしかないからである。ヴィトゲンシュタインはピタゴラスのタブローを破壊す

るが、そのタブローはユークリッド幾何学と同様に、地図学的論理の説明に他ならないのである。ヴィトゲンシュタインはこの論理を破壊し、「地図の上に」誰も見ることができないある物を見いだした。つまりこの場合に、それが $2+2+2=4$ である。

結論としてなにが言えるだろうか？ これから別の論理体系を発見することを余儀なくされている。なぜなら、地図学的体系が現実を把握するのに十分ではないからである。我々はさまざまな性質を扱うことができる体系を必要としている。なぜなら、対照的に同質性は量の水準でのみ諸問題を認識することを意味するからである。それが新しい地理学の問題である。**様々な性質を扱うための別のタブローを発見する**というこの作業に取り組んでいるクロード・ラフェスタンやゲンナ・オルソンらの名前を挙げることができる。地図の論理は、計量の論理と同様に、今日支持されない。毎日、我々はテレビの「ザッピング zapping」によって、等価性の勝利を意味する経験をしている。今日すべてが質の水準において等価になる。この講義では話さなかったが、かつて研究する必要があったマルクスを取り上げるならば、マルクスが描いたことは一般的等価性の体系であって、我々は現在、彼の書いたことを理解していることに気づく！我々には、使命に立ち向かい、それを完成するための論理がないが、おそらくこれからの地理学者の世代のなかにそれを発見することになる。そしておそらく将来の地理学者は、論理学者となるであろう。

注

1. マックス・ホルクハイマー/テオドール・アドルノ (徳永恂訳) 『啓蒙の弁証法』, 岩波書店, 1990.
2. 内山勝利編 『ソクラテス以前哲学者断片集』 第 分冊, 岩波書店, 1996.
3. クロード・レヴィ・ストロース (荒川幾男他訳) 『構造人類学』, みすず書房, 1972.
4. 宮谷宣史訳 『アウグスティヌス著作集』 5/1, 告白録 (上), 教文館, 1993.
5. マルティン・ハイデガー (桑木務訳) 『世界像の時代』, 理想社, 1962.
6. エルンスト・カッシーラー (宮城音弥訳) 『人間』, 岩波文庫, 1997.
7. プラトン (岩田靖夫訳) 『パイドン』, 岩波文庫, 1998.

8. ホメロス (松平千秋訳) 『オデュッセイア』 上・下, 岩波文庫, 1994.
9. ミハエル・バフチン (川端香男里訳) 『叙事詩と長篇小説』 『叙事詩と小説』, 新時代社, 1982.
10. プラトン (藤沢令夫訳) 『国家』 上・下, 岩波文庫, 1979.
11. ヘロドトス (松平千秋訳) 『歴史』 上・中・下, 岩波文庫, 1971, 1972.
12. 鈴木力衛訳 『モリエール著作集 2』, 中央公論社, 1973.
13. モンテスキュー (井田進也訳) 『モンテスキュー』, 中央公論社, 1980.
14. エルウィン・パノフスキー (木田元監訳) 『象徴形式としての遠近法』, 哲学書房, 1993.
15. 山本浩訳 『空間の経験』 筑摩書房, 1988.
16. J.-Claude Muller: La cartographie des espaces fonctionnels., *L'Espace Géographique* 12, 1983.
17. 細谷貞雄訳 『公共性の構造転換』, 未来社, 1973.
18. 野村正七訳 『地理学方法論』, 朝倉書店, 1957.
19. クラウゼヴィッツ (篠田英雄訳) 『戦争論』 上・中・下, 岩波文庫, 1968.
20. 1:80000 の地質図の誤りと思われる。
21. 松尾俊郎抄訳 『人文地理学』, 古今書院, 1929.
22. 飯塚浩二・田辺裕訳 『大地と人類の進化』 上・下, 岩波文庫, 1971, 1972.
23. バンジ (西村嘉助訳) 『理論地理学』, 大明堂, 1970.
24. Jean Burton: The Quantitative revolution and theoretical geography. *The Canadian Geographer* 12(4), 1963.
25. 中村秀吉・藤田晋吾訳 『ヴィトゲンシュタイン全集 7 数学の基礎』, 大修館書店, 1976.

なお訳出にあたり、次の書物(論文などは除く)を随時参照させていただいた。

- 岩田慶治 『コスモスの思想』, 日本放送出版協会, 1976.
 織田武雄 『古代地理学史の研究』, 柳原書店, 1959.
 水津一朗 『近代地理学の開拓者たち』, 地人書房, 1974.
 野間三郎 『近代地理学の潮流』, 大明堂, 1963.
 廣川洋一 『ソクラテス以前の哲学者』, 講談社, 1997.
 山野正彦 『ドイツ景観論の生成』, 古今書院, 1998.

【訳者あとがき】

本稿は、フランコ・ファリネリ教授の 1987-8 年におけるジュネーヴ大学での「地理学の歴史と認識論」の講義録であり、ジュネーヴ大学地理学教室から不定期に出されている *Géorhythmes* の第 5 号として出版されたものを訳出したものである(なお同誌は 5 号で終刊した模様である)。この原稿は、ジュネーヴ大学のルッジェロ・クリヴェッリ, シャルル・ヒュシー, ジャン・パオロ・トッリセリによって編集されたもので、序文をクロード・ラフェスタン教授(ジュネーヴ大学)が

書いている。ファリネッリ教授は現在、ポロニヤ大学で地理思想史や地理学認識論を研究しており、今までの主要論文は、『世界の記号 近代における地図学的想像力と地理学的言説』(1992)にまとめられている。またグンナ・オルソンやリュシアン・フェーブルのイタリア語訳なども手がけている。参考までに以下で、管見の限りで教授の主な著作を挙げておく。訳者の怠慢から翻訳が大幅に遅れたことを、ファリネッリ教授にお詫びしたい。

ファリネッリ教授の主な著書・論文

- (1976a) Pour l'histoire du concept géographique de Landschaft. A.Percora and R.Pracchi eds., *Italian Contributions to the 23rd International Geographical Congress*.
- (1976b) La cartografia della campagna nel Novecento. AA.VV., *Storia d'Italia* 6, Atlante. Einaudi, 626-654.
- (1977) La casa rurale nel Medio Indostan. *Rivista geografica italiana* 84.
- (1981) (a cura di) *Il villaggio indiano*. F. Angeli.
- (1983) Alle origini della geografia politica 《borghese》. C. Raffestin a cura. *Geografia politica: teorie per un progetto sociale*. Unicopli.
- (1984) Introduzione ad una teoria dello spazio geografico marginale. C. Cencini et al. a cura. *L'Italia emergente*. F. Angeli.
- (1985) Der kampf ums dasein als ein kampf um raum: teoria e misura dello spazio geografico dal settecento al giorni nostri. P. Pagnini a cura. *Geografia per il principe*. Unicopli.
- (1986a) Le 《circostanze》 di Dardel. E. Dardel: *L'uomo e la terra*. Unicopli.
- (1986b) Luoghi, strada, spazio: tra cartografia, geografia e potere. *Urbanistica* 84.
- (1986c) L'ambiente come contingenza e il mondo come rete. *Urbanistica* 85.
- (1987) Epistemologia e geografia. G. Corna Pellegrini a cura. *Aspetti e problemi della geografia*. Marzorati Editore.
- (1989a) Le incomparabili rivoluzioni. *Casabella* 553-554.
- (1989b) Cereza del rappresentare. *Urbanistica* 97.
- (1990) Dancing. W. Leimgruber ed.: *La transformation de l'environnement quotidien. représentations et pratiques*. Université de Fribourg.
- (1991) L'arguzia del paesaggio. *Casabella* 575-576.
- (1992a) L'esprit du paysage. L. Mondada F. Panese O. Söderström eds.: *Paysage et crise de la Lisibilité*. Université de Lausanne.
- (1992b) *I segni del mondo*. La Nuova Italia
- (1994) F. Farinelli G. Olsson D. Reichert eds.: *Limits of representation*. Accedo.
- (1995) L'art della geografia. *Geotema* 1
- (1997) L'immagine dell'Italia. P. Coppola a cura.: *Geografia politica delle regioni italiane*. Einaudi
- (1998) Did Anaximander ever say (or write) any word? *Ethics, Place and Environment* 2
- (1999a) Text and image in 18th and 19th century German Geography: The Witz of landscape and the astuteness of representation. A. Buttner, S. D. Brunn, U. Wardenga eds.: *Text and Image*. Institut für Länderkunde Leipzig.
- (1999b) Bologne ou de la pédagogie des choses. B. Lévy et C. Raffestin eds. *Ma ville idéale*. Métropolis.
- (2000) Friedrich Ratzel and the nature of (political) geography. *Political Geography* 19, 943-955.
- (2001) Mapping the global, or the metaquantum economics of myth. Minca, C. ed. *Postmodern Geography*, Blackwell.